機動戦士ガンダムSeed Destiny

リシュベル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダムＳｅｅｄ　Ｄｅｓｔｉｎｙ

【Ｎコード】
Ｎ８３１９Ｋ

【作者名】
リシュベル

【あらすじ】
機動戦士ガンダムＳｅｅｄ　Ｄｅｓｙｉｎｙを元にオリジナルを設定加えた二次創作です。

キャラ、機体設定

シオン・フタバ（双葉　紫苑）　（１９）

身長１８７ｃｍ　体重６６ｋｇ

本作の主人公。
《アージ・ファング》に所属するオーブの国籍を持つ元ザフト軍。
コーディネイター。
性格はクールと思われるが、本来は明るく友好的な面がある。
趣味は料理、機械弄り。
親が科学者ということでその才能も受け継がれているが、時たま妙な物も作るマッドな才能も受け継がれている。
遊びと称して開発したマッドなメカは沢山ある。

搭乗機体はブーゲンビレアガンダム。

軍に在籍していたころＭＳ開発部に所属していてシグーやディン、ゲイツなどのＭＳの開発、主に設計から製作に携わっていた。
先の大戦初期時はプラントに居たのだが、アラスカでのオペレーション・スピットブレイクからジンに乗り戦線に参加しだした。そしてＭＳ乗りとしての才能も見出し、初陣において多大な功績を収めた。
そしてパマナにおいて出力増加とビーム兵器を持たせたディンに乗り出撃し、この戦闘においても大いなる戦績を残した。そして二挺のライフルと当時試作段階であったビームサーベルを二本を装備し、戦場を駆けたとしてついた二つ名が「トゥーソード・トゥーガン」（二闘流）である。
そして専用のゲイツ・アクセルパンツァー（ビームクローを取り外

し、代わりにビームサーベル×２とビームライフル×２を装備させる）というＭＳを開発し第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦にてその二つ名を知らしめた。

そして終戦後、軍のアカデミーにＭＳ工学の講師として呼ばれ、シン達と出会うが、一年後除隊申請し軍を去り《アージ・ファング》に入る。

声のイメージは草尾　毅（ＴＯＰのクレス、スパイラルの浅月）

ブーゲンビレアガンダム

蒼を基調とし、背部にはシグーのブースターを模した可変式ブースターノズルがつけられている。
見かけはテムジンのガンダム版（表現しにくい）を模している。
主に接近戦を考慮して作られた機体。
全高１９．３４ｍ　重さ５９．０２ｔ
型式番号はＡＦＧ－０２

武装
ＦＦ？のガンブレードを基にしたビームライフル（砲身下部にビーム発生装置有り）×２
頭部バルカン×二門
高出力ビームサーベル×２
ビームブーメラン×２

リオ・レイヤ（零夜　理緒）（１８）
身長１６２ｃｍ　体重４８ｋｇ

《アージ・ファング》に属する、オーブ国籍の女性。ナチュラル。
性格はきわめて明るいの一言に尽きる。
情報収集が得意でいろんな国の裏事情を探る事が出来る。
開戦時はオーブに居たのだが、オーブ開放戦に巻き込まれ、悲惨な目に遭うが、それを感じさせない雰囲気を出している。終戦後にシオンと再会する。
搭乗機体はブレイブガンダム。
声のイメージは水樹　奈々（リリカルなのはのフェイト、ＴＯＳのコレット）

ブレイブガンダム
紫一色の竜を模したガンダム、背中の竜の翼の形をしたウィングにはスラスターも内蔵されている。
見かけはガンダムエピオン

全高１８．１８ｍ　重さ５７．９８ｔ
型式番号はＡＦＧ－２０Ｄ

武装
三連式多目的ビームマシンガンライフル×１
ヒートロッド付兵装功盾×１
高出力ビームナギナタ×２
胸部バルカン×２門
腰部レールカノン×２

シィルフ・タシル（２２）

身長１９１ｃｍ　体重６９ｋｇ

アージ・ファングのパイロット。コーディネイター。
シオンとはアカデミー時代の先輩後輩の仲だったが共通の趣味で息が合い、先輩後輩をこえた仲となった。
ザフトに所属していたＭＳ乗りだったが、パマナで行われた一方的な虐殺の行為に疑問を抱く。そして軍の命令に逆らい、軍の規律を乱したことで戦線から外されアカデミー講師行きが下された時に除隊申請を出し軍を去った。
軍を去ったあと、レイガに出会い≪アージ・ファング≫を共に立ち上げる。

登場機体はゲイツ・アクセルパンツァードライブ
声のイメージは関　俊彦（ＴＯＤ２のロニ。　ガンダムＷのデュオ）

ゲイツ・アクセルパンツァー
シオンが第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦において戦場を駆けた機体。ビームクロウを取り外し、ビームライフル、ビームサーベルを二つずつ装備。その他に前部スカートアーマーにマニピュレーターを取り付け、隠し腕として使用。接近戦においてその真価を発揮する。

Ｖｅｒ２　ドライブ　全高２０．１２ｍ（バックパック含：２４．２２ｍ）　重さ６５．８７ｔ
基本的な武装は変わらないが、動力源の変更、フレームと装甲を再製作し、出力の増加を図り、前部スカートアーマーのマニピュレーターを取り外し、ドラグーン・システムを取り付けるという当初のコンセプトからかけ離れた機体。バックパックはプロヴィデンスのを模す。

武装
ロングレンジレールガン×１
ドラグーン・システム（バックパックに大小三つずつ、両肩に一個ずつの計八個）の、総ビーム砲２４基
ビームランス×２
頭部バルカン×２

レイガ・ヴァレンス（３４）

身長１９２ｃｍ　体重７１ｋｇ

戦艦クリムゾン・ファングの艦長にして、傭兵部隊（実は何でも屋）アージ・ファングの隊長。ナチュラル。（妻子有）

ファイヤーヘヤーが特徴的なおっさん。（爆）　普段は軽い性格だが、戦闘では思い切りのよい判断をする肝っ玉のでかさを披露する。

もともとは地球軍の前線で艦長を務めていたが、オーブ開放戦時に、中立国に攻撃を仕掛ける連邦軍に嫌気が差し除隊し、アージ・ファングを立ち上げた。

声のイメージは井上　和彦（ＳＲＷ　ＭＸのロム・ストール。　Ｚガンダムのジェリド）

第一話「悲劇の始まり」

C．E　72

一年以上に渡って繰り広げられた、地球軍とプラント（Z．A．F．T）間の戦争は第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦において和平という形で終結を迎えた。

戦争終結後、事の発端となったユニウスセブンで新たなる条約を結び、お互いの手を取り合い同じ道を歩み始めた・・・・。

しかし平和な世界が訪れるならば、やがて混沌とした世界が訪れるのもあるだろう。　それが遅いか早いかの違いだけで。

なぜならそれは人が生きる世界ならば逃れようのない運命の歯車であるからだ。

漆黒に染まる暗闇の空間を二機のＭＳが推進剤を散らしながら疾走する。

片方の機体は蒼を基調とし、背部にはシグーのようなブースターがつけられている。

武装は、ビームライフルを二挺。だが一般的に出回っている物とは異なる形状をしている。
そのまま殴ってもダメージを与えられそうな感じだ。
もう片方の機体は紫一色の機体で、背中には竜の翼を型どったウィングがつけられている。
片手には三連のビームマシンガンを持ち、もう片方には先端にチェーンウィップが付いた多少大きめな盾を持っていた。
二機が宇宙空間を進む中、紫の機体から通信が入ったので回線を開くと水色の髪の女の子が映し出された。
『――――シオン、機体の調子はどう？』
「ん？　いたって問題はない」
シオンと呼ばれた金髪の青年が彼女――リオ・レイヤに言葉を返した。
『近くに戦艦はあるけどソッチでも確認できる？』
「あぁ距離八千にザフト艦が3隻かある、そんな程度だ。ホントに新型機がアーモリーワンで製造されてんのか？」
『今更私の情報収集力疑ってんの？』
「いや、ただそれにしては随分と警戒が甘いな――――」

突如コクピット内部にアラームが鳴り響き二人の間に緊張が走る。

『シオン、何があったの！？』

「ちょっと待て、おいアル何があった！？」

〈アーモリーワン内部にて三機の新型機が何者かによって強奪され、戦闘が開始された模様。
三機の新型機はカオス、ガイア、アビスと判明。　時同じくしてアーモリーワン宙域にて戦艦が出現、ザフトの戦艦が数隻撃沈されました〉

アルと呼ばれ、シオンの問いに応える様に音声が流れた。
どうやらこの蒼い機体はＡＩ搭載機の様だ。

「チィッ、リオの言った通りか……！！　おいアル！！　その戦艦はどこにいた！？」

〈レーダーにいきなり反応があったので恐らくミラージュコロイドを使用していたと思われます。
更にアーモリーワン外壁に亀裂が発生、三機の新型機外部に出ます〉

「ザフトの追撃は！？」

〈ＭＳが二機、ザフトの新造艦が時間を早め出航します〉

二機と聞き、ヤケに少ないなと変な違和感が頭をよぎった。
しかしそんな違和感を打ち消すように、再度危険を知らせるアラームが鳴り響き、シオンは顔を顰めた。

〈敵艦からＭＡが出撃、此方に気付いた模様〉

「敵艦のレーダーに引っ掛かっちまった様だな……。
リオ、ここは俺が引き受ける、お前は艦に帰投して艦長に伝えろ《やはり言った通りに戦争は始まる》と」

リオは『分かったわ』と言い残し、その場を後にした。

リオと言葉を交わした後、シオンは機体を移動させた

『さぁてその見たことの無い機体もザフトの新型かな？
おとなしく明け渡せば命までは取らないであげるが？』

モニターに映し出された紫の色をしたＭＡ、エグザスから通信が入った。

「生憎だがザフトの機体じゃない、《アージ・ファング》の機体だ。
それにそう易々と機体を明け渡す馬鹿が何処に居る」

『なるほどな確かにそうだな。　少なくともあの名高い傭兵部隊には一人も居ないだろう。
ならば力ずくで明け渡してもらおうか！！』

するとエグザスからポットが離れ、シオンの機体を弾丸の嵐が襲う。

「やれるものならやってみろ！！」

エグザスからの攻撃を避けるとシオンの機体も異形なビームライフル──シュミッターで狙いを定め放ち、攻撃を仕掛ける。

『それはビームライフルか…見たことの無い形だな。
しかし風変わりな武器も当たらなければ意味はない！！』

「それは悪かったな、ならこれでどうだ？」

そういって目の前に来たポットをシュミッターの砲身下部にビームを発生させ斬りつけた。
するとポットは二つに別れ爆散した。

『斬られただと？
どうやらビームエッジも内蔵されてるようだな』

「まだまだ序の口だ。　元ザフトの二闘流の腕、ナメるなよ」

『ふっ、まさか《トゥーソード・トゥーガン》が傭兵部隊に居るとはな』

エグザスは再度攻撃を仕掛けるそぶりもせず踵を返しその場から離れていく。

「なんだ、もう終わりか？
この機体を力ずくで奪うんじゃなかったのか？」

『余り欲ばるとろくな事が無いからね、君とはまた何処かでやりあうだろうからその時にしておくよ』

エグザスが離れてやがて見えなくなると、アルから報告を受ける。

〈新型機の三機、敵艦に収容されました。
同時にエグザスも収容、敵艦撤退していきます〉

「そうか」

〈ザフトの機体が二機、此方に来ます。
恐らく新型三機を追撃してた機体と思われます〉

更なる報告を受け、シオンは目を細めた。
アルからの報告を受けた直後に通信が入った。

『おい、あんた！！
一体ここで何をやって……ってシオン！？』

通信を開くと、いかにも少年って型にハマった感じの男の子が映し出された。

「シン……か？
お前、ここで何してんだよ、そんな機体に乗って」

『それは此方の台詞だよ！！　いきなりだまって軍を辞めて居なくなったと思ったらここに居てさ』

「……いきなり居なくなったのは悪いと思うが。とりあえずお前、説教だな」

『はあ！？　何でだよ！！』

シンはいきなり説教と言われ驚愕の色に染まる。

「年上に対して口の聞方がなってない。
言わなかったか？　年上と話す時は敬語を使え、コレは常識だ。と」

『す、すいません……』

「……よし、今は非常時だからそれでいいだろう」

そんな非常時に説教とか言うなよ、とシンは心の中で突っ込んだ。

シンとの話が終ったのを見計らってもう一機から通信が入った。

『お久しぶりです。シオンさん』

「レイか、久しぶりだな。アカデミーの時以来か」

『えぇそうですね、その節はお世話になりました』

「気にするな俺も人に教える事で教わる事もあるからな。　あれは俺も勉強になった」

『二人ともなにしてるの！！
敵艦を追うのよ、早く帰艦しなさい！！』

レイと話してると気の強そうな女性の声が割り込んできた、シオンの機体には二人以外から通信は入ってないのでシンとレイの機体に入れたのだろう。

二人は了解と言い、急いで帰艦した。

『コチラはザフト軍ミネルバ艦長のタリア・グラディスです。
貴方は敵艦のＭＡと戦闘してたそうね。敵ではないようだけど事情を聞きたいので本艦に出頭願えるかしら。所属名と名前を名乗って』

シオンは少しだけ考えたが、別に害がでるわけじゃなさそうなので身分を明かし、ミネルバに向かう。

「分かりました。
コチラは《アージ・ファング》所属、シオン・フタバ、コレより貴艦に向かいます」

第一話「悲劇の始まり」（後書き）

活動の場を自サイトからこちらに移すため作品の移行しています。
こちらもお楽しみいただけたら幸いです。

第二話「ユニウスセブン落下！？」

ミネルバに着艦したシオンは、格納庫にて機体から降りた。
思わぬ来客にその場にいた全員がシオンとその機体に注目する。
皆がシオンに注目するなか、シンとレイが彼の方に向かう。

「シオン！！」

「よっ、久しぶり。ってお前ら二人して赤服かよ」

「あ、俺とレイだけじゃないですよ。あとルナマリアも赤服なんですよ」

「彼女もか？
それにしても懐かしいな、三人揃って赤服とは驚いたな。
アカデミーの時三人して補習行きになったのは「シオンさん、その話はしないでください！！」

いきなり大声を上げるレイにシオンは笑いだすが、シンを除く他の皆はそんな彼の言葉に驚いている。

「「「「（あの冷静なレイが慌てている！？）」」」」

多分その殆んどクルーはそんなに慌てる理由を知りたいだろう。後にレイはその場にいたクルー達に尋問を受けたが固くなに内容を口に出さなかった。シンにも尋問の手が回ったがレイの威圧感が予想以上に強かったのでシンも固くなに口を閉ざした。

「（同僚にアソコまで質問されたり睨まれたりするのははじめてだよ……）」

後日の日記にシンはこう記したのだった。

「くくく、相変わらず面白いなレイは。
そういやルナマリアは？」

「お、俺で遊ばないで下さい。
彼女でしたら、今は艦長の所ですが。そう言えばシオンさんは艦長に呼ばれてましたね、ついてきて下さい案内します」

「わかった」

シオンはシンとレイに続き、格納庫を後にした。

艦長室に向かった三人だったが途中で応接室で議長と居ると副長のアーサーに言われ、三人はその応接室に足を向けた。

そして応接室に着いて扉を空けると、中にはグラディス艦長やデュランダル議長、オーブの代表やその付き人、そしてルナマリアの五人が居た。

「シオンさん！？」

「おや、やぁシオン君、久しぶりだね」

応接室に入ってきたシオンにルナマリアは驚きの声をあげ、デュランダル議長が話しかけてきた。

「お久しぶりです、デュランダルさん、あっスイマセン、今は議長でしたね。ルナマリアも久しぶりだな。　ざっと一年ぶりですかね」

「いや昔みたいにさん付けても構わんよ。そうかもうそんなに経つのか、いやはや時が経つのは早いものだな」

「議長、彼とはお知り合いで？」

デュランダルとシオンが親しげに話してるのを見かねてタリアは質問をだした。

「あぁ、彼とは先の大戦の頃から知り合いでね。
ＭＳ開発部に居てねＭＳの設計士なのだよ」

「まぁ二闘流のほうが有名だけど……」

そのシオンの一言にタリアやオーブの代表、その付き人であるアレックスの三人は驚愕の声をあげた。

「まぁまずはそこに座って。　で、あの有名な《トゥーソード・トゥーガン》がなぜあんな場所に居たのかしら、」

タリアはシオンに腰を掛けるように促すとシオンはそれに応じた。
「あっ、そっかその話で来たんだ。
簡単に言いますと俺が所属する《アージ・ファング》が手に入れた情報じゃ、ある部隊がザフトの新型機を狙っているってんで調査を兼ねて来たんですがどうやら的中したみたいですね。その時に敵艦のレーダーに引っ掛かって、敵のＭＡと交戦に入ったって感じですね」
「《アージ・ファング》ってあの傭兵部隊の？」
「そうですね、もともとは何でも屋だったんですが、傭兵活動ばっかやってたのでそのイメージが強いんですよ。
今では傭兵の仕事は受けないで、ジャンク屋としてやっていますがね」
「傭兵部隊がジャンク屋って・・・・・どうゆう組み合わせかしら。とりあえず今回の件はその《アーク・ファング》は関与してないと？」
「はい」
タリアはそれだけを確認すると一息をついた。
「どうかなグラディス艦長、私に免じて彼の言葉を信用してくれないかな？」
「議長がそうおっしゃるのでしたら、構いませんが」
「ありがとうございます」

シオンへの尋問が終わるや否や先ほどあった副長のアーサーから館内通信が入った。

『艦長、議長、申し訳ありませんが至急ブリッジにお越し頂けませんでしょうか』

「シン、彼を使ってない部屋に案内して。　シオン、悪いけど事態が事態なのですぐに開放してあげられないけど我慢して頂戴」

「いえ、疑いが晴れたのでしたら大丈夫です。　お気遣いなく」

「シオンさんこっちに、案内します」

シオンはシンに案内され応接室から出て行き、レイとルナマリアもついて行った。

「なんだって！？　ユニウスセブンが動いてるって、一体何故！？」

思いがけない出来事にオーブの代表、カガリ・ユラ・アスハは驚き

のあまり声を荒げた。　ユニウスセブンが軌道を外れ、地球に接近しているという報告がプラントからはいったのだ。

「それは分かりません。　だが動いているのです。　それもかなりの速度で、最も危険な軌道を」

「それは既に本艦でも確認致しました」

デュランダルの後ろに立っていたタリアもそれが本当だということを告白する。　すると、アレックスも声を荒げて言葉を放つ。

「しかし、何故そんな事に！？　あれは１００年の単位で安定軌道にあると言われていた筈では！？」

「それが隕石の衝突か、はたまた他の要因か。　ともかく確実に動いてるのですよ、今この時も地球に向かって」

「お、落ちたら、落ちたらどうなるんだ？　オーブは！？　い、いや地球は！？」

「あれだけの質量のモノです。　申し上げずとも、それは姫にもお分かりでしょう」

自ら口にせずともお分かりでしょう、と言わんばかりのデュランダルに、カガリとアレックスは表情をしかめる。

「原因の究明や回避手段の模索に、今プラントは全力を挙げています。またもやのアクシデントで姫には大変申し訳ないのですが、私は間もなく終わる修理を待ってこのミネルバにもユニウスセブンに向かうよう特命を出しました。

幸い位置も近いもので。姫にもどうかそれを御了承いただきたいと」
直径十数ｋｍにも及ぶユニウスセブンが地球に落下するという非常事態にカガリは深く頷いた。
「無論だ！　これは私達にとっても、いや寧ろこちらにとっても重大事だぞ。　私、私にも何か出来る事があるのなら……！！」
「お気持ちは分かりますが、どうか落ち着いて下さい、姫。　お力をお借りしたい事があればこちらかも申し上げますので」
「難しくはありますが御国元とも直接連絡の取れるよう試みてみます。出迎えの艦とも早急に合流できるよう計らいますので」
「ああ……すまない」
カガリはタリアの言葉に自分の力のなさに歯がゆさを感じていた。

一方シンに案内され、部屋に向かっていたシオンであったが、途中通りかかったレクリエーションルームでシオンはブラックの缶コーヒー、レイはオーブの厳選した茶葉を使った緑茶、シンは葡萄の果汁を使った炭酸飲料、ルナマリアは果汁１００％のジュースで各々

の喉の渇きを潤していた。
そんな中、メイリン、ヨウラン、ヴィーノがユニウスセブン軌道変更の件について話しをしていた。
「隕石でも当たったか、何かの影響で軌道がずれたか……」
「地球への衝突コースだって本当なのか？」
「バートさんがそうだって」
シンの言葉に、メイリンはミネルバで真っ先に地球にユニウスセブンが落下している事に気付いたバートと言う人物を挙げる。
「はぁあ、アーモリーワンでは強奪騒ぎだし、それもまだ片づいてないのに今度はこれ？　どうなっちゃってんの？　で、今度はそのユニウスセブンをどうすればいいの？」
「そりゃああれだ、砕くしかない」
シオンの声に皆が彼の方を見る。
「砕くってあのユニウスセブンをですか？」
「そうだ、あんなデカいもん、軌道修正なんか到底無理だからな。なら、砕いて少しでも小さくするしか無いんだ」
「でもデカいですよ、アレ？
ほぼ半分くらいに割れてるって言っても最長部は８ｋｍは……」
「そんなもんどうやって砕くんですか～？」

ヨウランがそう言うと、ヴィーノが年に合わない声を上げる。するとメイリンが僅かに表情を顰めて呟いた。

「それに、あそこには、まだ死んだ人達の遺体も沢山あるんじゃ……」

「でも、そうしないと数え切れないほどの遺体が増えるだけだ」

レイがそう答えると、多くの災害をもたらすものに、そんな甘ったれた事は言ってられない。とシオンは付け足しをした。　するとヴィーノが呟いた。

「地球、滅亡……」

「はぁあ、でもま、それもしょうがないっちゃあしょうがないかぁ？」

ヨウランは大きく溜め息をしながらこぼした。

「だって不可抗力だろう。　けど変なゴタゴタも綺麗に無くなって、案外ラクかもな。俺達プラントにとっては「良く、そんな事が言えるな！　お前達は！」

怒声を張りあげてレクリエーションルームに入って来るカガリに対し、皆が席を立ち彼女に敬礼をするが、シンだけが彼女に対して睨みつける。

「しょうがないだと！？　案外ラクだと！？　コレがどんな事態か、地球がどうなるか、どれだけの人間が死ぬ事になるのか、ホントに

分かって言ってるのか！？　お前達はッ！！」
「別に本気で言ってたわけじゃないさ、ヨウランも」
「！！」
「そんくらいの事も分かんないのかよ、アンタは」
「何だと！！」
「カガリ！！」
「シン、言葉に気を付けろ」
シンの人を馬鹿にしたような言葉にカガリはさらに怒りを露にする。
そんなシンにレイが忠告するが、シンは何の反省をした様子も無く、逆に逆撫でする様にさらに続けた。
「あ、そうでしたね。　この人偉いんでした。オーブの代表でしたもん――んがっ！？」
淡々と言葉を放つシンにシオンは飲み終えた缶を投げつけた。
「レイ、ルナマリア、シンを押さえろ！！」
「は、はい！！」
レイとルナマリアは二人でシンを押さえる。
「は、放せ！！」

「シン、お前自分で何言ってるのかわかってるのか！！　一国の元首に対して――」

「すいません、シオンさん。　少し彼と話しをしていいでしょうか？」

「ん？　・・・・・・アレックス、と言ったっけ、別に構わないよ」

するとアレックスはカガリの前に出てシンに話す。

「君はオーブがだいぶ嫌いなようだが、何故なんだ？　昔はオーブに居たという話を聞いたが、下らない理由で関係ない代表にまで突っかかるというのなら、それ相応の処置をとらなければならない」

その言葉にシンはピクッと反応すると、アレックス達にさらに吠える様に叫んだ。

「下らない、だって？　下らないなんて言わせるもんか！　関係ないってのも大間違いだね！　俺の家族は……アスハに殺されたんだ！」

「え……？」

意外な言葉に唖然となるカガリ。　シオンはシンの発言に眼を細めた。

「国を信じて、アンタ達の理想とかってのを信じて、そして最後の最後に、オノゴロで殺された！」

「あ……」

「だから俺は、アンタ達を信じない！　オーブなんて国も信じない！　そんな、アンタ達の言う綺麗事を信じない！　この国の正義を貫くって……アンタ達だってあの時、自分達のその言葉で誰が死ぬ事になるのか、ちゃんと考えたのかよ！」

「……シン、いい加減にしろ」

「なんでだよ！？　シオンさんの両親もオーブのオノゴロで亡くなったのでしょう！？」

「！？」

シンの発言にレクリエーションルームにいたレイとルナマリア以外の全員が驚いた。

「いい加減にしろっ！！！！！」

「うがっ！！」

シオンはついに堪忍袋の尾が切れたのかレイが先ほどまで飲んでいた緑茶の缶を再びシンに向かって投げつけた。

「お前の今の発言でオーブとプラントが戦争になったらどうする！？　一軍人である人物が国家元首に対しての暴言が許されると思っているのか！？　ユニウスセブンの接近で一気に世界中の緊迫が高まる中で思いがけない所から戦争の引き金になることもあるんだ！！　それをお前はそんな引き金を今、ここで引くつもりか！？」

「でも、俺の家族やシオンさんの家族もこいつの一族に殺されたも同然なんだ！　言ってみりゃ、こいつは犯罪者だ！　そんな奴が国のトップなんてものがおかしいんだよ！！」

「ちょっとシン！　それは言い過ぎ……」

「うるさい！！」

シンを押さえていたルナマリアの手を跳ね除け、シンは更に吼える。しかしついにシオンがシンに対し鳩尾に拳を入れる。

「がっ……！！」

シオンの拳を受けたシンはその場で蹲り、気絶した。　周りの人物もその鮮やかさに目を見開かされた。

「いったん寝てろ、あとで説教だ」

シオンがシンを見下す中、カガリがアレックスの前に出てシオンに話しかけた。

「あの・・・・・、そのさっきの話は本当なのか・・・？」

「あ、まぁ本当っちゃ本当ですね、オーブ解放戦の時に、ね。　でもだからって別にあなた達のこと怨んでませんから、安心してください。　こいつの事もそうですが、代表が負い目を感じることないですから」

いくらか負い目を感じてしまっているのであろうカガリにシオンは笑って答えた。

「だが……」

「オーブの理念って言うのは皆からすれば甘いかもしれません。ですが、その理念を信じる人もいるし、それを貫きたい人もいるのです。　どうか自信を持ってください。　少なくても俺はそんなオーブが好きだったので」

「！」

「本当の平和なんていうのは、代表みたいに理想持たなきゃ実現出来ないんですから。　それじゃ、レイ、ルナマリア、部屋に案内してくれこいつは俺が担ぐから」

そういってシオンはシンを肩に担ぎ、部屋を出て行きそれに続くように二人も出て行った。

シオンの言葉にカガリは驚かされいた。

「・・・・・カガリ、今日はもう休もう」

アレックスの声にカガリは賛同し、二人も部屋を後にした。

「・・・・・ところであのシオンって人、何であの三人と知り合いなの？」

張り詰められた緊張が解かれ場の雰囲気が戻り、ヨウランが近くにいたメイリンに質問をする。　ルナマリアの妹であるメイリンなら何かわかると思ったのだろう。

「えっと、シオンさんは一年前までアカデミーでＭＳ工学の講師をしていたの。　その時のお姉ちゃん達がシオンさんの教え子だったの」

「ふうん」

「――さて、どこのどいつだろうか。　あれを移動させ、地球を危機にさらしてる奴は・・・・・・・・」

シオンは通路を移動している時隣にいるレイにも聞こえないような声で呟いた。　その言葉にはいくらか怒りが込められていた。

第三話「墓標上の戦い」

シンへの説教が終えたシオンは、椅子に座り考え事をしていた。

ルナマリアとレイはうつ伏せになっているシンを見ながら冷や汗を垂らしながら合掌していた。　当のシンは口からヘドロのような液体を吐き、体にロープが何重にも巻きつけられ、明らかに生気の無い眼をしていた。

「（さて、どうしたものかな？　流石にうちのメンバーもコレには気づいているよな。

ミネルバは真相を突き止めるためにこれから向かうだろう。　それにそもそもわざわざこれを落として、馬鹿か・・・・？　犯人はおそらくは戦争強硬派だろうな、もしそうならコーディネイターだろう。　となるとザラ派か）」

「――シン起きろ、起きろ」

自ら生死の境に放り投げたくせにそれを無理やり引きずり出そうとする。

「・・・・・・・（シンの頬を叩く音）・・・・・・・・・・・・・」

「そうか」

顔を叩くが起きそうにないので別の方法を使おうとシオンは背中をゴソゴソと漁り、お目当てのものを取り出す。

「シオンさん？　それは・・・なんですか？」

シオンが取り出したそれは、レイとルナマリアの目を疑わせた。
先端に細長く、銀色に輝く針をつけたスポイト、いわゆる注射器を取り出した。　中の液体は赤とは程遠い、どす黒い色をしている。

「ああ、コレ？　これはまだ実験中の薬でね、まだ試したこと無いんだが予定では、虚脱状態でも一気に回復するモノだ、ちょうど目の前に実験体が「お、起きてます！！　起きてます！！　はい！！」

真の死の世界にホントに投げ込まれそうになる危機にシンは叫んだ。

「――シン、これからユニウスセブンの破砕に行くぞ」

艦内を移動していて、ブリッジに行く途中、カガリの付き人であるアレックスとバッタリ行きあった。

「お」

「あ、シオンさん。　先程はありがとうございます」

「あ、いや気にしなくていいさ。　それよりさっきは悪いね、気を悪くしたみたいだね。　アイツの代わりに謝罪するよ。　シンには説教しといたから、それで勘弁してやってくれないかな」

「いえ、それはいいのですが……誰かはそんな感情を抱いていることをわかっているつもりではいたんですが。　やはり実際言われると辛いものですね」

「そういうもんさ。　・・・・・・ところでさ、君、アスランだろ？」

彼にはアレックスと名乗ったのになぜ、本名がわかったのか、その事に表情をしかめた。

「やっぱり、終戦後ザフトを抜け、消息を絶ったって話は聞いてはいたが、まさかオーブに亡命していたとはな」

「そ、それは」

「いや、なんとなくわかるからそれ以上は言わなくていいよ。　それより議長に用があるのかな？」

「は、はい、ただ見ているだけなど、俺には出来ないですから、機体を借りに」

「そうか、俺も議長に用があってな、出撃許可をもらいに行くとこなんだよ。　おっと此処だな」

出撃という単語にアスランは驚いた。　そしてある扉の前に止まり、ドアを開けた。

「あ、ここにいた。　デュランダルさん、ちょっといいですか」

ブリッジに入る人物にその場に居たクルーが注目する。

「シオン君、にアスラン・・・いやアレックス君か、どうかしたのかね？」

「ええ、ユニウスセブンの破砕作業、俺も出ます」

「無理を承知でお願い致します。私にもＭＳをお貸し下さい」

二人の言葉にブリッジクルーが目を見開く。　するとタリアは、鋭い目つきでアスランに応えた。

「確かに無理な話ね。　シオンもそうだけど、今は他国の民間人である貴方にそんな許可が出せると思って？　カナーバ前議長のせっかくの計らいを無駄にでもしたいの？」

タリアのいう事はもっともだ、同じ軍の者ならば出て欲しいのだが、今のアスランは軍の者ではない、ただの民間人なのだ。　その民間人にそう易々と機体を貸すなどもってのほかだ。

「分かっています。　でも、この状況をただ見ていることなど出来ません。使える機体があるならどうか」

「気持ちは分かるけど……」

頭を深く下げるアスランに、タリアはどうするか困り果てた顔をすると、後ろの席に座っていたデュランダルが間に入った。

「良いだろう。私が許可しよう――議長権限の特例として」

「議長！？」

「戦闘ではないんだ、艦長。出せる機体は一機でも多い方がいい。腕が確かなのは君だって知っているだろう？」

どこか思い含めた笑みを浮かべるデュランダルに、シオンは疑問を抱いた。

「（なんだ、この違和感は・・・・）」

「シオン君、君の出撃も許可しよう。　君の腕は私も知っているからね。　ところで君の乗っている機体は君が設計したものかな？」

「なぜですか？」

「簡単なことだよ、君が手がけた機体には君の特徴が機体に現れる。あの機体の装甲も、おそらくは新素材を使用しているのだろう。おまけにあの見たことのない武装。　君はよく自分で改良を加えたり、発明するからな」

「……流石ですね、あれはまだ《アージ・ファング》の機体にしか使ってない素材（フェアリー・ガード）を使用しています。　その素材のおかげでＰＳ装甲以上の防御力を出すことが出来ます」

デュランダルは予想が当たり笑みを浮かべているが残りのクルーは

呆気を取られている。

「そしてあの武装はまだ試作段階ですが従来のビームライフルより遥かに凌駕しています。　それと、専用の追加ユニットと組み合わせると陽電子砲以上の破壊力を出すことが出来ます」

その言葉にざわめきが広がる。たかがＭＳが一隻の戦艦以上の火力を持つ、そんな馬鹿げた話があるのかと。

「俺の仲間もたぶん現場に向かってると思うのですぐにお目にかかるかと」

「君の仲間がすでに向かっていると？」

「えぇ、こういう事態が起こると必ず現場に向かうんですよ。　そういう連中の集まりです」

そうやって自嘲気味に言うと、デュランダルは口許を少し挙げた。

ミネルバとは違う場所で紅の戦艦が一隻航行していた。
その戦艦のブリッジと思われる場所にデスクを囲んで数人の男女が話をして居た。
その中にはリオの姿もあった。

「――ユニウスセブンが落下軌道に入った」

デスクを囲んでいる人物のうち、この艦の艦長であるファイアーヘアーで顔に大きな傷が特徴の男――レイガ・ヴァレンスが周りに言った。

「なんでユニウスセブンが落下軌道に入ってるんだ？
あれは当分安定軌道に入ってるから、隕石にも当たらなければずれない筈だ」

そんな艦長の言葉に疑問を抱いた、金髪の、かつ少しウェーブのかかった男――シィルフ・タシルが質問をだした。

シィルフの言葉に他の者、リオを含めた者が同意した。

「俺もな最初は疑ったさ、でもコレを見たらどうやら人為的に移動させてるんだ。カイン、例の図表示してくれ」

＜あいよ～、ほれ♪＞

カインと呼ばれ、それに応える声が流れるのと同時に一枚の写真がデスク上に表示される。この艦もＡＩ搭載型らしい。

「これは、ＭＳ！？」

写し出された写真には黒っぽいジンがユニウスセブンに外付けフレアモーターを取り付けている作業を写したものだった。それも一枚じゃない、かなりの枚数だ。

「ジン！？　ってことは、ザフトが！？」

「いやそれは無いだろう」

リオの言葉にレイガは否定した。

「どういうことだ？」

「ついさっきシオンから連絡が入った。『ミネルバはこれから現地のザフトとユニウスセブンの共同破砕作業に向かう、《バハムート・ユニット》の準備を頼む』だと」

その内容に皆の表情が険しくなった。

「あいつ、ここでアレを使うのか？」

「まぁ、砕くならそれくらいの威力は無いとな。

そこでリオ、シィルフ。二人は先に現場に向かってくれ」

「「了解！！」」

リオとシィルフの二人は出撃命令が下り、ブリッジから出て自らの機体に乗るために格納庫に向かった。

「本艦はこれよりユニウスセブンの破砕作業に向かう。サハナ、ランクB警報発令！！」

サハナと呼ばれた翠の髪のの女性――サハナ・バニングはすぐ様、席につき館内警報をならす。ほかの人物も同様にその場を離れ各々の席に座る。

「はい！！
ランクB警報発令、ランクB警報発令。
総員各自持ち場につけ、繰り返す、総員各自持ち場につけ」

「ヒビキ、《バハムート・ユニット》の準備、いつでも射出出来るようにしておけ」

「あいよ！！すぐ終らせてやるわ」

ヒビキと呼ばれた茶髪の男性――ヒビキ・ラッセルが頼もしいこと言う。

「ハット！！　艦の最終起動をはじめろ！！　二人が出たらすぐに向かうぞ！！」

「とっくにやっとる。　もう終わる」

ハットと呼ばれた、青髪の男性――ハット・シリアがコンソールのキーをすばやく叩く。

そして次から次へとクルーに指示を飛ばしていくと今度はリオとシィルフから通信が入った。

『おい艦長、こっちは準備終ったぞ』

『こちらも終わりました』

「おし、リオ、シィルフの出撃シークエンス開始！！」

「了解。
カタパルト接続、カタパルト開放、システムオールグリーン。進路クリア、出撃シークエンス完了。
リオ機、発進、どうぞ！！」

『リオ・レイヤ、ブレイブ、出ます！！』

リオのブレイブがカラーを鉄灰色から紫に変え、翼を広げ巣からとびだった。

「続いてシィルフ機。発進、どうぞ！！」

『シィルフ・タシルだ、ゲイツ・アクセルパンツァードライブ。出るぞ』

シィルフが乗る機体、ゲイツ・アクセルパンツァードライブが機体カラーを鉄灰色から銀色に変えた。

ゲイツ・アクセルパンツァードライブ……シオンが第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦において戦場を駆けた機体。
今は更に改修され、シィルフの機体となり、ドライブと言う新たな名を得てまた目覚める時が来た。
背部に円盤を背負い、円錐状の筒を突起のように生やしている。

「リオ機、シィルフ機共に艦から出撃しました！！」

「よし、全速前進。クリムゾン・ファング発進！！」

レイガの掛け声に深紅色の牙が宇宙に浮かぶ墓標を砕くため目覚める。

『ＭＳ発進三分前。　各パイロットは搭乗機にて待機せよ。　繰り返す、発進三分前。　各パイロットは搭乗機にて待機せよ』

メイリンのアナウンスが流れる格納庫を、シオンとアスランが自ら乗る機体のハッチまでとんだ。

「粉砕作業の支援て言ったって何すればいいのよ……？」

ルナマリアは自分の機体、赤いガナーザクウォーリアーに乗り込む途中にヨウランと話している。　そしてふと横目にシオンとアスランを見た。アスランも整備班の一人から説明を聞いている。　シオンは簡単な概要を聞くと直ぐに機動準備を始める。

「アイツ等も出るんだってさ。　作業支援なら一機でも多い方がいいってさ」

「へぇ～。　ま、ＭＳには乗れるんだもんね」

アスランのＭＳとしての操縦の腕前はわからないが、シオンは自分達の講師である上に、あの《トゥーソード・トゥーガン》と言う、異名を持つのだから少なくてもそこら辺にいるＭＳ乗りよりは腕が上だろうと思った。

そして、今は同じ場に立つ、その腕を拝見するにはうってつけだった。

『モビルスーツ発進一分前』

レイの機体が格納庫からカタパルトに移動され、アスランはハッチを閉めて起動準備を始めるが。

『発進停止！　状況変化！！　ユニウスセブンにてジュール隊がアンノウンと交戦中っ！！！』

その時、告げられた報告にアスランは驚く。　ジュール隊という名前だ。　ジュール・・・・・・？

「イザーク・・・・・・か？」

彼が知る中でザフトでジュールと言えば一人しか思い浮かべられない。　常に自分と張り合っていた熱血漢な元同期。

『アンノウン？』

シンの僅かに戸惑った声も聞こえた。

『各機、対ＭＳ戦闘用に装備を変更して下さい』

『更にボギーワン確認。グリーン２５デルタ！』

「どういう事だ！？」

次から次へと変化する状況にアスランは声をあげた。

『分かりません！　しかし本艦の任務はジュール隊の支援であることに変わり無し！　換装終了次第各機発進願います！！』

モニターに映る出されるメイリンも何が何だかな顔つきで応えた。

すると、彼女に替わってルナマリアがモニターに映った。

『状況が変わりましたね。危ないですよ・・・・・・お止めになります？』

皮肉を込めた物言いに、アスランは眉を顰める。

「馬鹿にするな」

すると、今度は別の機体から通信が入った。　シオンからだ。

『アスラン、久々の実戦だ、お前ほどの腕だと大丈夫と思うが、もし危なくなりそうなら離脱しろ』

『シン・アスカ。　コアスプレイダー、行きます！！』

シオンがアスランに通信を入れてる途中に、シンが先に艦外へと出撃した。

「いえ、やれることはやります。　ご心配なく」

『レイ・ザ・バレル。　ザク、発進する！！』

シオンの忠告にアスランは自らの決意に責任を持つように、忠告を断った。

『ルナマリア・ホーク。　ザク、出るわよ！！』

『そうか、ならその言葉信じるぞ　シオン・フタバ。　ブーゲンビレア、出撃するぞ！！』

シオンが出撃した後、アスランは目を閉じて一息入れた。　変化し続ける状況だが、いまは動く事が先だ。　ユニウスセブンが落下を阻止する為にかつての仲間がでている。　なら自分が指を咥えて見ているわけには行かない。

「アスラン・ザラ、出る！！」

『ちぃ！　あいつら！！』

現場に着いたシン達が見た光景はジュール隊と交戦しているカオス、ガイア、アビスの姿だった。
三機の機影を見てシンが真っ先に飛び掛っていく。

『あの三機、今日こそ！』

シンにつられ、ルナマリアとレイもあの三機へと向かう。

「目的は戦闘じゃないぞ！」

あくまでも破砕作業の支援だと言うシオンに、ルナマリアが返した。

『分かってます！！　けど撃ってくるんですもの。　アレをやらなきゃ作業もできないですよ！？』

「あの三機、状況がわからないのか！？」

すると胸に抱く異様な、なんともいえない感じがシオンを襲った。

「っく、なんだ、この感じは！？」

『シオンさん、どうしました！？』

シオンの呻き声が聞こえたのか、ルナマリアが通信を入れてきた。

「い、いやなんでもない。　（この胸を締め付けるような感覚、あの三機からか！？）」

シオンは妙な感覚を抱きながら両手のシュミッターを構え、攻撃を開始する。

「シン、ルナ、レイ、俺が援護する。　その三機を足止めするんだ！！」

『『『了解！！』』』

「アスランは作業支援に向かってくれ！！」

『わかりました！！』

アスランが皆から離れメテオブレイカーと呼ばれる削岩機の作業支援に向かった。　直後、シオンを含む四人は強奪された機体と戦闘になだれ込んだ。

アビスの攻撃を避けつつルナマリアを狙ってるガイアに対してビー

ムを放ち相手の注意をそらす。　ルナマリアはその隙を逃さず極太のビームを放つ。しかし目標には当たらずその横を過ぎていった。

そしてシオンを狙っていたアビスにシンがビームを放つ。レイも相手の行動をよく読みカオスに攻撃を仕掛けている。

すると新たな機体の接近を知らせる、アラームがなる。

＜新たなＭＳ接近を確認、ブレイブ、ゲイツ・アクセルパンツァードライブです＞

「きたか」

紫の機体と、銀色に輝く機体がシン達と強奪された三機の間にビームライフルを撃ちながら入る。

『またアンノウン！？　こんな時に――！！』

「シン、警戒しなくていい。　俺の仲間だ。　遅かったな」

シオンの仲間といわれ動揺する、しかしそれは一瞬だけだった。

『お待たせ。　いやあ待たせちゃったね』

『状況はどうなってる？』

モニターにリオとシィルフの姿が映し出される。　レイだけはシィルフの姿を見て、かなり驚いた様子を見せる。

「見ての通り、破砕作業中に強奪された三機が邪魔しにきて応戦中。

二人はシン達の援護をしてくれ、俺は破砕作業の支援にいく」

『わかった、それと《ババムート・ユニット》、クリムゾン・ファングが後から来る。　間に合うかわからんがな』

「わかった、二人も、危なくなったら離脱しろ！！」

それだけを言ってシオンは踵を返し、破砕作業の支援に向かった。

『グゥレイト！　やったぜ！！』

メテオブレイカーを設置して二つに割れたユニウスセブンを見て、ディアッカの嬉々とした声が入ってきた。　イザークも割れたユニ

ウスセブンをみて、安堵の表情を浮かべる。

『だがまだまだだ！　もっと細かく砕かないと！』

その時不意に入ってきた声に二人は驚く。　懐かしい声、二年前同じ隊長の元で行動していた仲間の声。

『アスラン！？』

「貴様ぁ！　こんな所で何をやっている！」

ザフトを抜け、今ではオーブに亡命しているはずのかつての仲間がなぜ自軍と同じ機体に乗っているのか、それが気になり言葉を返す。

『そんなことはどうでもいい！　今は作業を急ぐんだ！！」

『あ、ああ・・・・！！』

「貴様に言われなくても分かっている！」

三機はメテオブレイカーを運ぶために並んで移動する。　いまディアッカの機体がメテオブレイカーを持っている。

『お前らぁ、退けぇえっ！！』

すると三機に通信が入り二機のＭＳが前を通る。　それはシオンの機体と黒っぽいジン・・・ハイマニューバ２型だった。

シオンは敵のジンに近づく、ジンは獲物でシオンの機体を攻撃しようとしていたが、それを腕に固定されてる小型のシールドで受け止

め、相手を蹴り上げる。　そしてすぐさま機体の姿勢を安定させ、シュミッターのビームを当てて、ジンを撃破する。

『シオンさん！？』

「シオン！？　シオン・フタバか！？」

『おいおいおい！？　なんで《トゥーソード・トゥーガン》が此処に居るんだ！？』

「アスランどういうことだ！？」

知り合いのようにシオンの名を放つアスランに訳を話すように促す。

『話すと長くなるからパスだ！！　　！？』

今度は敵機の接近を知らせるアラームが鳴る。　シン達と交戦していたアビスだ。

『イザーク！！』

「五月蝿い！！」

アスランの忠告を怒鳴り返すイザーク。

「今は俺が隊長だ！　命令するな、民間人があっ！！」

そう叫ぶと、イザークはビームアクスで、アビスのビームランスを破壊する。そこへ、アスラン追い討ちとばかりにビームトマホークが左足を切断した。

そこへ、アビスの加勢にカオスが駆けつけたが、アスランはビームライフルで牽制し、イザークのビームアックスがシールドを切り裂いた。　応戦しようとしたカオスがイザークに気を取られている間、今度はアスランが接近しビームトマホークで右腕を破壊した。

シンは、呆気をとられていた。　自分達が戦っても決定的なダメージを与えれなかった三機を息の合ったコンビネーションで退けたアスラン達に。　しかも、自分のような新型ＭＳではなく、量産されているザクで圧倒したのだ。

「（すげぇ・・・・・・あれがヤキン・ドゥーエを生き残ったパイロットの力かよ）」

突如、アラームが鳴り、シンはハッとなって振り返るとジンがすぐそこまで来ていた。　斬機刀でインパルスを切り裂こうとしていた。

「（しま……！）」

しかし、迫って来たジンは、突如、別の機体が飛んで来てシンの機体を抱えて避けた、しかし一瞬遅かったため右腕が切り落とされてしまった。

『何をボケッとしている！？　お前、死にたいのか！？』

シンを助けたのはシオンだった。　シオンは片腕でシンを支えるともう片方の方でビームを放ち、ジンを破壊した。

「す、すいません！！」

その時、何処からか信号弾が飛んだ。

「！？」

それは、彼らが追っていたボギーワンと呼んでいる艦からだった。

『奴ら、退いて行く？』

『なんで？』

「おそらく高度だろう、くそ、もうそんなになったのか！？」

シンとルナマリアの疑問にシオンが答える。　二人はハッとなるが、シオンは舌打ちをする。

するとミネルバがユニウスセブンと共に降下し、破砕作業を行うという指令と帰還命令が入った。

ミネルバに戻ろうとしたその時、シオンはユニウスセブンにまだ残ってメテオブレイカーを取り付けているザクを見つけた。

「何をやってるんだ！？」

シオンは、未だにメテオブレイカーを設置するアスランの元へとやって来て声を上げた。

『帰還命令が出たでしょう！　通信も入ったはずだ！！』

『ああ、分かってる。君は早く戻れ』

淡々と答えて作業するアスランに、シンはさらに言う。

『一緒に吹っ飛ばされますよ！　いいんですか！？』

『ミネルバの艦主砲と言っても外からの攻撃では確実とは言えない。これだけでも……』

そんな身の危険も顧みずに作業を行い続けるアスランにシンは少しだけ彼に対する見方を変えた。

『貴方みたいな人がなんでオーブになんか……』

「アスラン！　シン！！　ウチの艦が来ればミネルバと破砕作業を行う。　それに艦が来れば俺も破砕作業に移る。　此処はもういいから二人は早く離脱……！！」

その時、彼らのコックピットにアラームが鳴り響いた。すると、ジンが三機、彼らの元へと迫って来た。

「また新手か！」

すると、回線を通してジンのパイロットと思われる声が聞こえた。
三人は散会して、それぞれのジンと対峙する。
『ウォオオオオオッ！！　これ以上は、やらせんぞ！！』
『我が娘のこの墓標、落として焼かねば世界は変わらぬ！！』
『娘？』
通信回線から聞こえるにシンは眉を顰める。
『何を……？』
その話を聞いたアスランが割って入ってくる。
『この地で無惨に散った命の嘆きを忘れ、討った者達等と何故、偽りの世界で笑うか！？　貴様等は！！』
その言葉にシンは動揺する。
『軟弱なクラインの後継者どもに騙されて、ザフトは変わってしまった！！　何故気付かぬか！？　我等コーディネーターにとって、パトリック・ザラの取った道こそが唯一正しきものと！！』
その言葉に、アスランは動揺し判断が遅れたため、ジンの刀がザクの足を叩き切った。
「ふざけるなぁ！！」

次の瞬間、シオンは叫んだ。　その叫びとともにアスランを襲ったジンを破壊する。

「憎むなとは言わない！！　だが、コレを落としてなんになる、それで犠牲になった人が蘇るとでも思っているのか！？」

「！？」

シオンの言葉にシンは目を見開く。　それに対しテロリストは更に怒りを込めて言い返した。

『痛みを知らねば世界は変わらぬ！　ならば、我らはその引き金となる！』

「それで、また同じ悲しみを持つ人たちを、お前らの手で作り出そうというのか！？」

『世界が正しきものに戻るなら甘んじて受け入れる！！　貴様のような何も知らん若僧が知った風な口をきくなぁ！！』

「このくそ野郎！！！」

どうしても言葉を聞き入れようとしないジンのパイロットにシオンはシュミッターで切り裂き、止めを刺した。すると大気圏に突入するアラームが鳴り響いた。

「くそ！　高度が！！」

『アスランさん！』

ダメージが激しいアスランの機体が重力に引っ張られ、地球に落ちて行く。　シンが追いかけて、ザクの手を掴むが、インパルスの推力をもってしても抜け出すことが出来ず地球に向かって落ちて行った。

「くそ！」

『シオン！！』

その時リオの声が聞こえ、ブレイブが目の前に現れた。　その手には大型のライフルと思わせるものが引かれていた。

『《バハムート・ユニット》もってきたよ！！』

「リオ！！　ってことはクリムゾン・ファングは来たのか！？」

『えぇ、すでにハウリングの標準がユニウスセブンに向けられているわ』

「助かった！！　リオ、お前はあの二機を連れて地球に下りてくれ！！　俺も破砕したらすぐ行く！！」

『わかったわ！！』

シオンはリオから受け取り、シュミッターをセットし、エネルギーチャージを始めた。

リオはシオンに手渡すとすぐさま落ちていった二機に向かっていった。

リオは、シンを追いかけ、落ちていくその手を掴んだ。

「!?　なんだあんたは!?」

『私はシオンの仲間です!!　その新型のパイロットは私と一緒にシールドを壁にして地球に下ります!　緑のザクのパイロットは私達の後について来てください!』

「な……!?　何で見ず知らずのアンタの言う事なんか聞かなきゃいけないんだよ!?」

『いいから黙って、言うことを聞け!!』

ザクが一回肩のシールドを前に出していたが耐え切れなくて破壊された。故にブレイブとインパルスの二機で先に突っ込み、アスランはどちらかの機体の後ろに居た方が効果的だった。　それほかにいきなりの口調の変化とドスの効いた声に逆らえないことを悟り、言うことを聞いた。

「くそっ!」

『行きますよ！』

リオがそう言うと、まず手を離して先頭に出る。　その隣にシンが来て、二機がシールドを前面に押し出した。アスランは、リオの足に掴み、そのまま三機は地球に降下していく。

『クリムゾン・ファング、聞こえるか！？』

シオンは近くに居るだろう仲間の戦艦に通信を入れた。

「レイガだ、《ババムート・ユニット》はうけとったか！？」

『あぁ、準備完了だ！！　これからミネルバが陽電子砲を放つ、残った方の破片にハウリングをぶち込んでくれ！！　俺も《メテオ》を放つ！！　その後はこのままリオとともに地球に降下する、シィルフは戻ったか？』

「ああ、さっき着艦したぞ。　おっしゃ！！　全員対ショック態勢

入れ、ハウリング発射後地球に降下して二人を迎えに行く！！　何か近くのものにしがみついておけ！！」

レイガが皆に指示を飛ばし、ハウリングの発射態勢に入った。

するとミネルバから陽電子砲が放たれ、一方の破片が砕かれた。

それを見た、レイガが発射命令を出す！！

「シオン！！」

『あぁ・・・・！！』

「ハウリング、撃てぇーーーーーッ！！！！！！」

クリムゾン・ファングの先端に取り付けられた陽電子砲が音無き悲鳴を上げ、もう片方の破片を襲う。

『いっけぇーーッ！！！』

同時にシオンもチャージが終わった《メテオ》を放ち陽電子の尾を引きながらもう片方へと襲う。

そして、砕かれたユニウスセブンの破片が流星となり地球に多く降り注いだ。かつて戦争の発端となった悲しみの欠片で、それを訴えるかのように地球に落ち、多くの被害をもたらすのだった。

第四話「進路はオーブへ」

地球に降下してきた四人はその後、無事ミネルバとの合流を果たし着艦したが、機体を収容したあと、凄まじい衝撃と振動がミネルバを襲った。

おそらく破片が地上に落ちてきたものの第一波だろう。　地球を一周してきたにも関わらずこの戦艦をこんなに揺らすほどの衝撃、地球にどんなダメージを被るのかは誰の目から見ても明らかである。そしてその被災者の数も尋常じゃないはずだ。

空は隕石の衝撃で舞い上がった粉塵が空を覆い、日の光を遮って薄暗かった。

ミネルバは進路をオーブにとった、カガリをオーブに送り届けるためだ。　そんな中、空を見上げる一人の青年が思いにふけていた。

「オーブか・・・久々だな・・・・・。　あの日以来か・・・」

空を見上げる青年、シオンはある日のことを思い出しながら目を瞑った。

一年前　――オーブ慰霊碑前――

空が薄暗く、いかにも雨がきそうな天候、崖に打ち付ける波の音の中私服姿のシオンとシンがそれぞれ花束を持ってオーブの慰霊碑前に立っていた。

二人はアカデミーの休暇を利用してオーブに来ていたのだった。

「ただいま、かあさん、とうさん、マユ。　お参り、遅くなったけど、来たよ」

「ざっと三年ぶりだ、久しぶりだね。　そっちは元気でやってるか？」

慰霊碑にむかって今はこの世に亡き家族に向かって挨拶をすると、花束を置き黙祷を捧げた。

「「・・・・・・・・・・・・」」

波が岩場に当たる音だけが辺りに響く。やがて数秒がたった後にシオンが目を開けて言葉を放った。

「そろそろ一雨きそうだな、戻るか？」

「そうですね」

二人がその場を後にしようと慰霊碑に向かって背を向けたが・・・・

「あ」

一人の青年と目が合った。　年はシンよりひとつかふたつ上な感じだ。

「君も慰霊碑にお参りに来たのか？」

「え、いや・・・・・・ここに来たのは初めてだから、実はよくわからないです。　それも自分で来るのは・・・」

どこか気の弱そうな感じのする青年だ。　なにか思うところもあるのだろうかとシオンは思った。

「オーブの・・・・人ですか？」

「うん、でもオーブに住んでから日が浅いけどね・・・・」

「そっか、なら君もここで亡くなってしまった人たちに祈りを捧げたらどうだい？」

「そう・・・・ですね」

すると青年は慰霊碑の前に行き手を合わせた。

「・・・・・・・・」

しばらくの間青年が手を合わせていると、ポツッとシンの頬に雨の雫があたった。

「あ、降ってきた。　シオンさんそろそろ戻りましょう」

「そうだな。　君、うちはここから近いのか？　車で来てるから送

ってくよ？」

「あ、ありがとうございます。　でもここから数分で着く所ですから大丈夫です」

「そっか、じゃあ気をつけてな」

青年は会釈すると、二人は道路に止めてある車に走っていった。
車に急いで乗り込むとシオンはキーを回し、エンジンに火を入れ、車を走らせた。　運転手席にシオンが着いて、その隣の助手席にシンが座っているという位置になっている。

「そういや冷蔵庫にはあまり物無かったな、買い物しなくちゃな」

走行中の車の中でシオンが思い出したかのように呟いた。

「今日は何にするんですか？」

「う～ん、そうだな・・・・・シンは何がいい？」

「そうですね～、魚がいいです」

「魚か・・・・よし、じゃ今日は奮発して刺身にするか。　リオも魚好物だからな」

今夜の献立も決まり、シオンは車のギアを変え、市場へと向かった。

「――ほんと久しぶりだね、シンくん。　大きくなったね～、身長なんか追い越されちゃってるよ」

甲板へと続く通路をリオとシンの二人が肩を並べて歩いていた。

「まぁ成長期ですからね。　それにしてもすいませんでした」

「え、なにが？」

いきなりシンが立ち止まって頭を下げる行為に？マークを頭上に浮かべた。

「降下時にあんな口の聞き方をしてしまい、まさかリオさんとは思いもしなったので・・・」

「いいよいいよ気にしなくても、私もまさかシン君がザフトの新型機に乗ってるとは思わなくてすごいこと言っちゃったからね。　お相子よ」

「あの口調の変わり方、すっごい怖かったんですけど・・・・・・」

シンの顔に青筋が浮かびおびえた表情をみて、リオは苦笑いしながら恥ずかしそうに誤魔化す。

「あはははは～あれはつい、ね」

「でも艦長はリオさんたちに何の用があるんだろう？」

「さあ？　とりあえず何らかの処置をするんじゃないのかな？」

「処置？」

処置、という単語に今度はシンが？マークを浮かべた。

「今は普通にこうやって行動してるけど。　ほら、私とシオンはここのクルーじゃないし、ましてやこの艦、ザフトの最新鋭の艦でしょ？　カガリ様とその付き人の二人はオーブの代表と護衛だからいいけど私たちははっきり部外者なんだよ。　それもＭＳを操れるパイロットだし、それでも軟禁されてもしょうがないもの。　そろそろ何らかの処置しなければクルーに示しがつかないでしょ」

「え、でもユニウスセブンの破砕に協力してくれたじゃないですか？」

「う～ん、まぁそれをふまえた上での処置だと思うけど」

「そんな悠長な・・・・。　あ、そこの扉の向こうが甲板です」

「あれこれ考えたってしょうがないよ。　あれは自分たちで考えた結果だし、いまさら悔いたって遅いしね。　あ、いたいた」

扉を抜けると潮風と薄暗い空が二人を待っていた、そこで手すりに手をかけ空を見上げているシオンが居た。

「シオンさん、艦長が呼んでますよ？　シオンさん？」

「――シン君、ちょっと下がって耳塞いでて。　すぅ～・・・・・・・シオンっ！！」

シオンの背後でシンが呼んでたが反応がないため、リオが顔をニヤニヤしながら横について息を吸った後、１拍置いて大声を上げた。

「うおっ！？」

シオンはその声に驚き、手すりから飛び退いたが足を滑らせ・・・・・

ごん！！

「～～～～～～～～～～～ッ！？」

床に鈍い音をたてて倒れてしまい、後頭部を押さえ、呻きながらのた打ち回っていた。

「い、痛そう・・・・・」

「あ、ははは・・・・・大丈夫、じゃなさそうね」

「おい、リオっ！！　いきなりなんだ！？」

「呼んでも反応が無いからさ効果のある行動に出たんだけど効き目はあったみたいね」

痛みの続く後頭部を押さえながら起き上がり、目じりに涙を溜めながらリオに迫った。

「だってさシン君が呼んでんのにまったく反応しないんだもん」
「はぁ？」
シオンの目が点になり、視線をシンに向けた。
「呼んだのか？」
「え、えぇ。　艦長が呼んで来いと」

――艦長室――
「あなた達二人はここで釈放します」
艦長室へと向かった二人を待ち受けていたのはタリアが放ったこの言葉であった。
「釈放・・・・ですか？」
「ええ、シオンは表面上捕虜としていたんだけど議長の計らいで協力者ってことになってるのよ。　もちろん隣の彼女もね」

「そうなんですか・・・・あれ？　でもここでってどういう意味ですか？」

リオは先ほどタリアの放った言葉を思い出し疑問を口にした。

「あなた達の艦、＞クリムゾン・ファング＜って言ったかしら？　その艦が近くに来ているのよ。　通信を入れたらあなた達の迎えに来たって言ってたわ」

「意外と早かったな」

「で、もうそろそろオーブの領海に着くからここでってことね。本艦は代表をオーブに送り届けなきゃいけないからオーブの領海内には入れるけど、あなた達の艦は入れないでしょ？　だからあなた達の機体は破砕作業協力のお礼も兼ねて整備しておいたわ。　ただシオンの機体は武装も含め特殊な構造だったため応急処置ぐらいしかできなかったけど」

タリアは申し訳なさそうに放つがシオンはそんなことも気にもせず次のように述べた。

「いえ、応急処置でもできれば良い方ですから気にしないでください」

シオンが放った《メテオ》は反動が大きくシュミッターの一つが大破し、もう一つは修理可能な中破で済んだ。

「――コソッ（ねぇ、アルと機体の情報は大丈夫なの？）」

「ボソッ（あぁ、ロック状態にしておいたし俺の遺伝子情報じゃないと解除できないからな。　機体の動力源も俺以上にＭＳ工学に精通した奴じゃなきゃアレは存在すら気づくこともないさ）」

「？　どうかしたかしら？」

二人が内緒話をしているのをみてタリアが不思議がって口を開いた。

「いえ、なんでもないですよ」

「そう、ならここでお別れね。　次に合う時は敵同士じゃないことを祈りましょう」

「そうですね、それでは失礼します」

二人はタリアに頭を下げると艦長室から辞した。

艦長室から出るとシンとレイとルナマリアの三人が心配そうな表情で二人を待っていた。

「シオンさん、どうでした？」

「お咎めなしさ、でも一回お別れだ」

「え、何でですか？」

「恐らくシオンさんの所属している艦が近くにいるんだろう。　さっき艦長がその艦に通信を入れるのをみたからな」

ルナマリアの疑問にレイが答え、シオンはその回答に頷くことで正

解を示した。

「そういうこと。　なんでもそろそろオーブの領海に入りそうだからな、そこまでウチの艦じゃ入れないだろ？」

「そんな・・・せっかく久々にシオンさんといろんな事話したかったのに」

「はは、そんな拗ねんなって。　また会えるさ近いうちにな」

そういってシオンはシンの頭に手を置いた。　その姿はまるで兄弟のようにみえた。

「でもほんとお前ら三人がザフトのエリートパイロットになっているとはな。　講師としてうれしい限りだな」

頭の上に置いた手でシンの髪をクシャっとする。

「ちょ、ちょっとやめて下さいよ！！」

「ははは、じゃな。　また会うまで元気でいろよ」

「じゃね、シン君」

「「「はい」」」

シオンとリオは一時の別れの言葉を口にし背を向けて格納庫へと足を向けた。

「そういえばシンさ、あの女の人と知り合いなの？」

「え、あぁあの人はシオンさんの幼馴染だよ。　アカデミーの休暇にシオンさんとオーブに行ったんだけど、そこでお世話になった人だよ」

「へぇ～」

「ただ、そのときはシオンさん共々酷い目にあったんだけどね・・・・」

「そ、そう・・・・」

シンのこの世の終わり的なその表情にこれ以上突っ込まないほうが安全だ、とルナマリアは思った。

――格納庫：ブーゲンビレアのコクピット――

「さて・・・、アル。　もう起きていいぞ」

シオンはブーゲンビレアのコクピット内で機体の起動準備をしてい

た。　リオも自分の機体、ブレイブで準備をしていた。
シオンはメインパネルの隣にある小型のパネルに手をかざしＡＩを呼び起こした。
〈あれ？　もう大丈夫なの？〉
ヴン・・・・という機械が起動する独特の音を出し、どこか幼さの残る声がコクピット内に響く。
「アル、大丈夫だとは思うが機体のチェックを頼む。　何か弄られてないか」
〈わかった。　・・・・・・・・うん、異常は確認しなかったよ。
まぁ流石に動力のほうは気づかなかったみたいだけど〉
「そりゃそうだろ。ロック状態にしたんだからな」
機体の起動準備をしながらアルと言葉を交わしていると、ブレイブから通信が入った。
『シオン？　こっちの起動準備は完了したよ？』
「わかった。　こっちももうそろそろ・・・・・・・・っし、終了。
ブリッジ、聞こえますか？　こちらの準備は終わりました。　そちらの準備が出来次第離艦します」
ブリッジに機体の発進準備の完了を報告すると、通信モニターにメイリンの姿が映し出された。

『わかりました。　ではカタパルトを開放しますので合図があるまで待機していてください』

「了解」

通信が終わると、カタパルトの先が徐々に開いていき眼界に海が広がっていく。

『カタパルトの開放を確認。　発進可能です』

メイリンの合図で先にリオのブレイブがでて、次にシオンのブーゲンビレアがミネルバから飛びだった。

――クリムゾン・ファング：ブリッジ――

「ちょ、おっちゃん、ストップストップ！！　グエッ、間接と首決まってるって！！」

「お前という奴は～、なにザフト艦に乗ってたんだこの野郎！！」

戦艦クリムゾン・ファングに帰艦した二人であったが、ブリッジに入った時の歓迎はレイガによるコブラツイスト（改良が加えられチョークスリーパーとのコラボレーションとなっている）が決められ、シオンは悶絶直前であった。

「よく無事に出れたな」

「えぇ、なんでも破砕作業協力のお礼だそうです」

騒がしい二人をスルーし、シィルフは降下後の状況をリオに聞いていた。　そこで、シオンの機体のシュミッターの破損やミネルバでタリアに無条件釈放を言われたことを耳にし、相槌を打った。

「成程、しかしあいつのシュミッター、一個は大破で、もう一個は中破か・・・・。　《バハムート・ユニット》の反動ってでかいのか小さいのかわからんな、機体には反動を受けてないんだろう？」

シィルフは陽電子砲並みの威力を持った武装を使用したはずなのに機体にはそれらしき損傷が見られない。と指摘した。
たとえミネルバで整備や修理を行われても痕が残るものだ、だから余計に疑問になるのだろう。しかし当の本人は――。

「こ、この状態で、こたえ、られるか～！？　　グエェ～～～～～～～～～～～！！」

ボキッ・・・・・・

鈍い音とともにシオンの体はそのまま崩れ落ちるかのように地面に伏した。

「よし、こいつの処理も終わったし、次の目的地にいくか」

「次？」

「そうだ、日常物資も切れ始めてきたからな、そろそろ調達が必要だったわけよ」

「となると、オーブへ？」

「そういうことだ、とりあえずリオとシオンはオーブに住んでたんだから地理はわかるよな。戻ってきて早々悪いんだが買出しに行ってきてくれ。　あと一人か二人ぐらい行ってくれるか？」

レイガはそういってブリッジを見渡す。するとシィルフが名乗り出た。

「なら俺も行こうか。　軍を辞めた時、会いたい人物がオーブにいるって話なんでな」

「？　だれ？　俺も知ってるひと？」

気絶状態からすばやい復活を遂げたシオンは、その人物に興味を示した。

「あぁ、先の大戦ではかなりの有名だ。　なんたって『砂漠の虎』、アンドリュー・バルトフェルドだからな」

第五話「二人の再会」

ミネルバがオーブに入港した次の日にシオン、リオ、シィルフの三人はオーブの地を踏んだ。

三人は日常的に必要な物資を集めるために市街地を回り、いろいろな店を見ていた。　現時刻は二時を回ったところだ。

シオンは青のGパンとベージュのYシャツ、リオはピンクのキャミソールに緑のスカート、シィルフは白いシャツに黒のズボンという出で立ちである。

「ところでシィルフ。　なんでバルドフェルトさんに用があるのさ？」

シオンは大きな紙袋と両腕に荷物を抱え隣で歩くシィルフに声をかけた。　シィルフも高く詰まれた荷物で顔は見えないが視線をシオンに向けて声を返した。

「軍に身を置いてた時に一時期だったがバルトフェルド隊に配属されてた。　まぁ数ヶ月で転属されたがな、最初誰も俺に近付こうとはしなかった、最初に話しかけてきたのはバルトフェルド隊長だったわけだ。　その数ヶ月の間、いろんな事を教わった」

「ふ～ん」

「俺にとっては尊敬する人であり、恩人でもある人だ」

シオンはシィルフの言葉に相槌を打った。　三人は港からレンタ

ルカーショップで借りた車が止めてある駐車場につき、荷物を車に積み込んだ。　するとリオが二人に向かって言葉を放った。

「ねえ、二人はこれからそのバルドフェルドさんのところにいくんだよね？　後は私だけでも出来るから行って来ていいよ？」

「そうか？　じゃあ車の鍵は渡しておくからな、あとは頼むぞ。シオン、あれ、持ってきてるか？」

「トランクにあるよ」

シオンは車のトランクを開けて、二人分の黒く光るインラインスケートを取り出した。

これは、シオンが遊びで開発したもので、ラッシュと呼んでいる代物だ。　中には高速回転モーターが装備されている。内蔵のバッテリーで動くようになっていて、乗用車以上の速度が出せるようになっている。

シィルフはシオンから受け取るとはいてた靴を脱いで大きめのポーチに入れ、ラッシュを履きだした。

「これは、昔俺らが白兵戦を想定した模擬戦に使用したのとはちがうか？」

車に寄りかかりながらスケート靴を履いているシィルフはある違和感を感じた。

「あぁ、これはアレから改造を加えて速度も耐久性もアップした改良版。

フェアリー・ガードのテスト素材を組み込んでるから問題だった耐久性も解消できたんだ。　データじゃまだまだ速度上げられそうだけど、生身じゃそれ以上は無理だね」

履いたスケートをつま先でトントンッと地面を小突き、感触を確かめる。

このスケートは並外れたバランス神経と身体能力、動体視力を必要とする。　そのため主にパイロットであるシィルフとその実力に並ぶシオンが自由に行動できるのだ。　ちなみにレイガも試してみたがレイガはあまりの加速で壁に激突して全治三週間の怪我を負い、リオはナチュラルな上、女性であるため急加速による付加に耐え切れないのだ。

「今朝渡したメモは持ってるよね？」

「ん？　あぁ、これだろ」

「それそれ」

スケート靴を履き終えたシオンは今朝リオから渡された一枚のメモ紙をズボンのポケットから取り出してリオに確認を取った。

「おし、シィルフこっちはＯＫだ」

「わかった。　リオ、鍵だ。　レイガには明日戻ると言っておいてくれ」

「わかりました」

シィルフは鍵をリオに渡すと二人はロックを解除して、ラッシュにバッテリーという血を駆け巡らせた。　二人の姿は砂埃を巻き上げながらすさまじい速度であっという間に見えなくなってしまった。

――――某所――――

「調子はどうだ？」

薄暗い部屋、前面には格納庫内が見える窓があり、いくつもの端末や機材が用意されてる部屋だ。

「順調です、この調子ならあと少しで調整が完了します」

男性が近くの技術者に経過を聞き、それに対して研究員は振り返って答えた。

「そうか、引き続き作業を頼む。　『ソレ』は彼の部隊に送るのだからな」

「わかりました」

研究員は再び機材に向き直ると作業を再開し、男性はその部屋から出て行った。

「くくく、シオンよ。　お前がこれを見る日が楽しみでならんよ。お前の驚く顔が目に浮かぶよ」

男性はシオンの名を口にし、高らかに笑い声を上げながら暗闇の通路に消えていった。

格納庫には無数の配線につながれた見覚えのある機体が目覚めの時を待っていた。

「！！」

二人は港へと続く海岸線の道路を疾走する中、シオンは何かに反応し、スピードを落としラッシュを停めた。

「シオン、どうした？」

そんなシオンの行動にシィルフは何かあったのかと思い聞いてみた。

「いや、なんか声が聞こえたような・・・・」

「・・・・・俺には聞こえないが？　気のせいじゃないのか？」

「・・・・・・そうかも」

気のせいだろうと思い込み、二人は再び道路を疾走しだした。

「ところで、お前こそ隊長と知り合いそうだが、なんかあったのか？」

「ん？　あぁちょいとバクゥの発展機を開発してくれと言われてね、そこからなんだよ。　バクゥなんて俺が携わってたわけじゃないからいろんな基本データや構造データなどを貰って、バルトフェルドさんの戦闘データも組み込んで、とかいろいろあったんだよ。

まあ人がよかったからね、時々現地に行って対談してたけどおかげでいろんなことを学べたんだ」

「・・・・・・そうか」

シィルフは相槌を打つが一息ついて引き続き言葉を放つ。　それもかなりの険しさで。

「シオン、ユニウスセブン降下事件の犯人はコーディネイターと知ったら連合軍はどう出ると思う？」

その問いにシオンは考え込んだが、それは一瞬で終わった。

「・・・・・・シィルフが考えてることと同じだと思うけど」

と、苦笑を浮かべて答えを返した。

「そうなるか、だがそうなると戦闘は避けられないな」

「犯人グループは全員あの世だし」

二人の考えはこうだ。　まず連合がプラントに要求するものの一つ目は『犯人グループの引渡し』。

犯人グループはコーディネイターなのは明らかに知れ渡っているのでこれを要求するのはこぼ間違いないだろう。

しかしこのグループはミネルバのシン達とシオン達で撃破してしまい生存者はいない。　よって引渡しは不可能だ。

そして二つ目は確証はないが連合の一方的な条件を提案するだろう、そうなるとプラントも馬鹿ではないのでそんな不条理な要求をのむことはないだろう。　となると、連合は武力行使にうってでるだろう。　結果、両者がとなる。

「近いうちに開戦されるのは間違いないだろうな」

「・・・・・・だな」

それ以降会話は無く、ラッシュの走行音だけが二人を包んでいた。

そうこうしてる内に潮の香りが二人の鼻腔を刺激した。

「海が見えてきたな」

「海、か・・・・あ、シィルフちょっと寄る所あるんだけどいいかな」

「寄るところ？　少しなら構わないが・・・・どこだ？」

「慰霊碑」

その言葉にシィルフは眉を顰めた。

「（そういえばこいつ両親をここで亡くしたって言ってたな）いいが、時間の関係もあるから手短に頼むぞ」

「わかってるって」

二人は潮風があたる海岸線沿いをものすごい勢いで疾走っていった。

ザァッ・・・・・・！！

「ここか？」

数分後、波の音が響くこの場所に時と同行している人物は違うがシオンはこの場所に戻ってきた。一年程の歳月を経てその慰霊碑は潮風と雨風にうたれてずいぶん風化して見えた。

「そう、しばらくこない内にずいぶん風化したな」

シオンは再び慰霊碑に黙祷を捧げるのを見て、シィルフも先の大戦の被害者達に悔みを申しあげる。

「――――そろそろ行こう、早く隊長を探さないと」

「え？」

「「？」」

いきなり幼さの残る声が聞こえたので、二人は後ろを向いた。すると黒い服を身に纏う青年が立っており、二人が振り向いた瞬間、シィルフの顔を見ると声を荒げて後ずさりした。

「！！　あなたは！？」

「？　俺がどうかしたのか？」

どうやらシィルフを誰かと間違えたのか、数秒ほど見つめると頭を下げた。

「あ、いえ、すいません。　知ってる人に見えたんで」

「あれ、君、一年前の・・・・」

「え？」

シオンはその青年の顔を眺めていると、不意に声を出した。

「やっぱりそうだ、ほら覚えてるか？　一年前、ここで一回だけだけど話したことあるよね、『君もここで亡くなってしまった人たちに祈りを捧げたらどうだ』って」

「あ、あの時の？」

「そうそう、あの時だよ。　久しぶりって言うのもなんか変だけど。元気だった？」

「え、ええ」

明らかに動揺しまくりの青年に対してシオンは青年の手を握りぶんぶんと上下に振った。

「知り合いか？」

シィルフはシオンがやけに親しそうに話してるのを見て知り合いだと思ったのだろう。

「ああ、一年前、教え子の奴とここに御参りに来たんだよ。　で、その時にこの子に会ったんだよ」

「そうなのか？」

「はい・・・・」

戸惑いがちにうなずく青年にシィルフは「なにかやったな？」と目でシオンに訴えかけた。

「失礼な、いくらなんでも初対面の奴に何かをしでかすわけないだろ。　そういえば、君この近くに住んでるって言ってたね？　ならさバルドフェルドって人知らないかな？」

「え？」

「おいキラ、何してる？」

シオンが青年に質問をしていると砂浜のほうから男性の声が聞こえてきた。　一同がその方向へと顔を向けるとシィルフは言葉を失った。

「・・・・・・隊長」

その男性はガタイのよい体つきで顔に大きな傷が入った背の高い人物だった。　その男こそシィルフが会いたがっていたアンドリュー・バルドフェルドだった。

「ん？　お前、シィルフ・・・・・か。それにシオン？」

「・・・・俺はついでですか？」

「ああ、悪い悪い。　そんなつもりは無いんだが久方ぶりなんでな」

三人でなつかしの談笑をしていると黒服の青年、キラが遠慮がちに割り込んできた。

「バルドフェルドさんの知り合いですか？」

「ああ。　こいつ、シィルフは先の大戦でお前たちと戦う前まで俺の隊に配属されてたんだ。　で、隣のシオン君はザフトのＭＳ開発部に居た技術者で、俺がラゴゥの製作を依頼した人物だ。　二人ともコーディネイターだ」

「あ、キラ・ヤマトです、よろしくお願いします」

礼儀正しく頭を下げるキラに対し、シィルフとシオンはそれぞれ自己紹介をするとキラを含めた三人は握手を交わした。

「シィルフ・タシル。　アージ・ファングに属するメンバーだ」

「俺はシオン・フタバ。　同じくアージ・ファングのメンバー。よろしくな」

アージ・ファングと聞いてバルドフェルドが反応を示した。

「なんだ？　お前ら揃いも揃ってそこに所属してるのか？」

「知ってるんですか？」

「あぁ、ここ最近有名になってる傭兵部隊だ。　ところでなんで二人してここに居るんだ？」

「日常物資の補給のためにオーブに寄ったんですが、隊長がオーブに居るという話を聞きましてそれで久しぶりに会ってみたいと思ったわけです」

「そうか。　まぁお互いつもる話もあるだろうし続きはウチでしようじゃないか。　特製のコーヒーをご馳走してやるぞ」

「では、お言葉に甘えてお邪魔させていただきます」

四人はバルドフェルド先行のもと、慰霊碑から離れていった。

海が見えるところに建てられたアスハ家の別邸に着くと二人は広間と思われる部屋に通された。その部屋にはシオン達二人を含めた計七人の男女がテーブルを囲うように椅子に座っていた。
その中にキラと年齢が同じくらいでピンク色の髪が目立つ女性、ラクス・クラインが居た。

この部屋にいるのはマルキオ、バルドフェルド、マリュー、キラ、ラクス、シィルフにシオンというメンバーだ。

「――――まぁまずは飲んでくれ、自慢の特製コーヒーだ」

そういってバルドフェルドは二人にオリジナルブレンドのコーヒーの入ったカップを差し出した。　シィルフとシオンはその香り豊かなコーヒーを受け取ると口に運んだ。

「しかしまぁ二人とも生き残ってたか、お互いまだまだ死ねないなぁ」

「そうですね、生き残れたのは隊長のお教えのおかげです」

「いやいや、生き残れたのは君自身の力だ。　俺は何もしてないぞ。　シオンも、相変わらず変なもの作ってるのか？」

趣味で発明しているモノを『変なもの』といわれ、少しむくれ顔になるシオン。

「失敬な、俺がいつ変なもの作ったというんですか？」

「じゃあ昔、部下たちに薬盛ったのは誰だったかな～？　滋養強壮剤とか言っておきながら飲んだ直後白目むいて一週間ベッドの上で寝込んでたんだぞ？」

「「「え・・・・！？」」」

バルドフェルドの発言に冷や汗を出しながら当の本人を見る一同、目は見えないがマルキオも顔を向けている。

「まだまだあるぞ、バクゥを二足立ちできるように改造を施したり、外部音声スピーカーで咆哮出来るようにしたり・・・・もうチョイまともな改造は出来ないのか？」

バクゥの二足立ちで咆哮するという図を頭の中で描いたのかキラ、マリュー、シィルフはプッ、と吹き出した。

「まあ～バクゥの改造はともかく、薬の方は滋養強壮効果を目標にしてたんですけどね。配合間違えたかな？」

そこまでいうとバルドフェルドは立ち上がり、シオンに腕菱十字固めが放たれる。近くにいたシィルフはその修羅場から一足早く避難した。

「この野郎！！　お前のせいでこっちは酷い目にあったんだぞ、全員の目が虚ろになっててまるで亡者みたいになってダコスタ達に

襲い掛かって行ったんだぞ！！」

「ちょ、腕、腕！！　あたたたた、完璧に極まってる！！　折れる折れる折れる折れる折れる折れる折れる――――！！」

床にタップをするが無情にもレフェリーが存在しないためその音は虚しく部屋に響き渡る。

「あらあら、元気がよろしいですわね」

ラクスがこう漏らしたのに対しキラはその光景を冷や汗をたらしながら見ていた。

第六話「奇襲」

深夜、シィルフとシオンにあてがわれた部屋に二人は寝息を立てて寝ていた。

ピクッ…

何かに反応したのか、シオンは目を開き上体を起こした。

「……シィルフ」

シオンは隣りで寝ているシィルフを起こそうとした。

「あぁ、わかってる」

二人はベッドから降りて着替え、ラッシュを履き、シィルフはポケットガンをシオンはナイフを取り出し部屋を出た。

「シィルフ、シオン……」

「貴方達…どうして」

部屋を出るとバルトフェルドとマリューが銃を持って険しい顔つきで二人を見た。

「こんな真夜中に来るとは不謹慎な…バルトフェルドさん、友人は選んだ方がいいですよ？」

と、シオンは苦笑しながらバルトフェルドに言って――

「阿呆、友人だったら話の分かる奴しかしないわ」

――――と、返された。

するとシオン達の隣りの部屋からキラが出て来て、四人の手に持っている物を見て驚いた。

「キラ、早く着替えろ。君はキラと一緒に彼女と子供達を頼む。俺はシィルフ達と迎え撃つ」

「いや、隊長。俺とシオンで迎え撃ちますからお二人と一緒にお願いします」

バルトフェルドの案にシィルフが異を唱えた。

「悪い、じゃあ頼む」

バルトフェルドは言いながらいつの間にか着替えてきたキラとマリューと共に子供達を避難させに行った。

「……シオン」

「あぁ……」

シオンとシィルフの顔つき真剣になり瞳の色も変わっていた。

リビングに降りると夜中であって窓から差し込む月明りが幻想的な雰囲気を醸し出している、普段ならこの風景を楽しいたいが事態が事態だ。

窓から人の気配がすると、シィルフは爆竹を取り出して火を点け部屋の真ん中に投げた。

爆竹が弾けるとそれに気付いた敵は音のした方に向かってあらゆる方向からマシンガンを放つ。

「結構いるな、しかもかなり統率とれてる。　シオン外から迎撃頼む。中は俺がやる。並の奴じゃないから慎重に行け」

「わかった、半分はすぐに片付ける」

シオンはリビングに降りる階段の途中にある窓から外に出て狭い足場を頼りに壁伝いに一人の敵の上にたどり着いた。

別邸の中ではシィルフと来客者による激しい銃撃戦が繰り広げられている。

シオンは壁から飛び下り、落下速度と遠心力を利用した力で一人を壁側に蹴り込む。

その人物は苦悶の声を出しながら倒れるが、それに気付いた仲間はシオンを撃とうと構える。

「遅い！！」

シオンはラッシュを走らせ一気に間合いを詰め、掌で顔面を抑え地面に叩き付けた。

「貴様！！」

背後に居た敵がシオンに銃弾を放つが、それを避けると持っていたナイフで胸元を切り裂いた。

鮮血が飛散るが臆する事無く次なる敵を探した。

「（こいつら、まさか？）」

シオンはとある疑問を抱くが今はそれどころじゃないので頭から振り払った。

倒した敵から武器を奪い、ナイフを鞘に納めるとそれらを背中にしまい新たに妙な物を取り出した。

「こいつの性能ぶっつけ本番だが試してみるか…」

シオンが持つその妙な物とはあたかも画用紙を折り返しを繰返して持ち手を付けた物、……俗に言うハリセンなる物のようだ。

「さぁて餌食になりたい奴は掛かってきな！！」

その表情はいささか邪気を帯びているかの様だった。

「グァッ…」

「妙だな、数が多過ぎる……何が目的だ」

シィルフは次々と敵を倒して今は弾倉を換えているところだった。

「ここを襲って何の意味がある……。まさかラクス様か？」

シィルフはここには何か特別な物があるのかと思った。　ここはアスハ家の別邸だ、金目のものはあると踏んだんだろうと思ったがそれは物じゃなく“者”だった。

そう思案していると不意に発砲音とは違う音が響いた。

「この音、シオンか…」

音の正体を操ってるのはシオンだと判り、シィルフは少しだけ敵に同情した。

「敵が飛んでるように見えるが……気のせいだろ」

シィルフは割れた窓から見え聞こえする外の状況を頑に無視した。

「これならシオン一人で大丈夫だろな」

シィルフは倒した敵のイヤホンを耳に付け、所々ノイズの混ざった音声がシィルフの耳に入る。

〔目標は子供達と共にエリアEに移動中、武器は護衛の女と男以外持って無い、早く仕留めろ〕

「チィッ、急がなければ」

シィルフはこの場をシオンに託し、バルトフェルド達の元へと急いだ。

「バルトフェルドさん後ろ！！」

バルトフェルド達はマルキオや子供達をシェルターに避難させる為廊下を移動中だった。

マルキオは通路の奥にあるシェルターの扉を開ける作業をしていた。

バルトフェルドは敵を撃破すると辺りをマリューと共に警戒する。

するとシェルター入口の向かい側の扉が開き人が出て来た、二人は銃口をその人物に向けた。

「隊長、ご無事でしたか」

扉から出て来た人物はシィルフだった。

「シィルフか、脅かすなよ寿命が縮むぞ……」

「シオン君は？」

「あいつなら外に居る奴を迎撃してます」

シィルフの発言に二人は焦りの色を表わす。

「あいつ一人で大丈夫か！？」

「なんと言いますか……シオンの餌食になってると言った方がわかりますか？」

「……あぁ、なるほどな」

「…どういうことかしら？」

妙に納得している二人に冷や汗を浮かべつつ追求する。些かやな予感がするにも関わらず。

「昼に俺が言ってたこと覚えてるかい？“妙な物創ってるか”って」

「え、えぇ…」

「シオンがこういう時に使う物は大抵エゲツない物なんだ、だから妙に安心してしまうんだ……ただ相手に同情してしまうがな」

「ラクス！！」

シェルターの扉が開くのと同時に聞こえるキラの異常と思える叫びと共に聞こえる銃声。

敵は通気口の鉄格子の間から砲身を突き出しラクスを狙ったものだった。

しかしキラの行動でラクスに怪我は無いが、かわりにキラの二の腕に被弾してしまった。

鮮血が飛散りその光景を見た子供達が各々悲鳴をあげた。

「「「キラ（君）！！」」」

マリューとバルトフェルドは鉄格子の敵に銃を向けるが次の瞬間。

「グァアッ！！」

悲痛な叫びと共に敵は外壁を壊し、通路の壁に頭から突き刺さった。

「な、何事！？」

濛々と立ち込める砂煙の中からハリセンを担いだシオンが歩いてきた。

「ゲホッ、ゴホッ！　だぁくそ！！数が多過ぎだ、早く入って！！」

シオンの言葉を皮切りに全員はシェルターへとなだれ込む。

「はぁ～～……」

シェルターの扉が閉まりロックが掛かる事を確認すると、マリューは大きく息を吐きその場に座り込んだ。

「隊長、奴等って……」

「コーディネイターだな、しかも特殊訓練を積んだ兵士だ」

「ザフト、ですか？」

撃たれた箇所の応急処置を親であるカリダに受けながらキラは自らの予想を口にする。

「コーディネイターの特殊部隊って訳？　…最っ低…」

あからさまな溜め息を吐き毒をつく。

「キラ、大丈夫か？」

「えぇ、何とか」

「ったくなんだってここが襲われなきゃいけないんだ？」

「……大体ですがおおよその予想はつきます」

バルトフェルドの吐き捨てるようなセリフにシオンは自らの見解を出した。

「本当か！？」

「はい。でもこれはある意味最悪な物です。　ここ襲撃の目撃はラクス様の暗殺です」

シオンの一言に一同が驚きの声を上げた。

「なんでラクスが狙われなければいけないんですか！？」

キラが憤慨しシオンに叫ぶように尋ねる。

「キラ、落ち着いてくださいませ……シオン様どうか私が狙われなければならない理由をお教え頂けませんか？」

叫ぶキラを宥め真剣な表情でシオンに尋ねた。

「先ほど仲間から知らせがありまして、プラントにラクス様が現れたそうです」

「「「え？」」」

「・・・・順を追って説明しましょう。　まずユニウス・セブン落下事件に対する連合側の理不尽な要求をプラントは断りました。

しかし連合側は武力行使による強行手段に乗り出したのです……

……核と言う名の手段に」

シオンの口から核と言う単語が出て来、その場に居た核の威力を知る者は身震いさせた。

「核だと！？」

「プラントは！？　プラントは無事なのですか！？」

「はい、プラントは連合による核の使用を見越してたのか、強制的に核爆発を起こさせる装置を使い無事でした。　その戦闘は先程まで行われましたが今は停止しています」

プラントが無事だと言う事に安堵の息を吐くラクス、しかし話はこれで終わりじゃない。

「いまプラント市民は混乱状態です、そこで先程話したラクス様が現れ市民を落ち着かせたと、言う訳です。　何故プラントが偽のラクス様を用意したのかは判りませんが……。　しかしそれを出したという事は最高評議会の誰かが一枚噛んでるとしか、これは予想ですがね」

「まさか議長が？」

「可能性はあります、デュランダルさんなら今なお根強い人気と支持を得ているラクス様の力を使い、市民を丸め込んでるかと」

シオンはズボンのポケットから端末を取り出し、プラントにいる偽ラクスが演説している映像をみんなに見せようとしたが、激しい衝撃に見舞われた。

「地震！？」

「いや、違う。ＭＳによる攻撃だ、アイツらラクスごとここを潰すつもりだ！」

「……ラクス、あの扉を開けて」

「キラ！？」

シェルターに走り続ける衝撃のなか、キラは意を決したのか真剣な表情でラクスに言った。

「（扉？）」

「このまま大切な人を守れずにいるのは嫌なんだ、だから…」

「キラ、お前この扉の向こうに何があるのか知ってるのか？」

「えぇ、薄々ですが…」

ラクスは困惑の表情でバルトフェルドを見るが彼はラクスを見て頷いた。

するとラクスの手に持っていたハロが二つに割れ、二本の鍵が姿を現した。

「キラ、そこの台座に鍵穴があるから鍵をそこに。　同時に回すぞ」

二人が同時に鍵を回し厳重な扉が開かれる、そこにはキラにとって相棒とも言える機体がそこに眠っていた。

キラはその機体に進むためキャットウォークを歩き出す。

「キラ、ここは俺に任せてくれないか？」

キラの前にシオンが立ちはだかった。

「機体に乗って出るのはいいがいまの君は負傷している。だから代わりに俺が出る」

「だけど！！」

シオンの発言にキラは叫んだが、その瞳に違和感を感じたのか、やがてキラはシオンに任せる事にした。

「安心しな機体を壊す様な真似はしない」

「……分かりました、じゃあお願いします」

キラの承諾を得てシオンはキャットウォークを歩き出した。

キラ達はその背中を静かに見送りながら扉は閉まって行った。

「彼はＭＳに乗れるの？　技術者って聞いてたけど」

扉が閉まった後マリューは思い当たった点を口にした。

「大丈夫だ、アイツは『二闘流』の異名を持つ人物だ、それにフリーダムやジャスティスを基礎設計から開発に携ってたから性能も熟知しているだろう」

「『二闘流』ってあの？」

マリューの問いにバルトフェルドは頷く事で肯定を表わした。

「それに先の大戦でプラントから離反した時に秘密裏に協力してくれた奴だ。　信用性は俺が保障する」

「フリーダムの基本設定が微妙に違ってるな…、パラメータデータも変わってるし……造り直したみたいだな」

シオンはフリーダムに乗り込みシステムを起動しながら各部のチェックを開始した。

「これじゃあのシステムの起動は出来ないな。　まぁなくても十分だが・・・一丁やるか！！」

フリーダムの起動シークエンスを終わらせ灰褐色の機体に命を吹き込んだ。

「さて、行くか」

シオンはビームライフルで隔壁を破壊し外に飛び出た。

「なんだあの機体……ってカエルかあれ」

外に飛び出たシオンが見た物は翠を基調にしたカラーリングが施された機体、アッシュだ。アッシュの姿に幾分驚きと呆れを含ませビームライフルで、近くにいた機体を爆散させる。

「元々は俺が手掛けた機体だ、存分に行かせてもらうぞ」

フリーダムに迫り来る弾丸の嵐を巧みに躱し、ビームサーベルでアッシュを斬り払う。

「運が悪かったな、俺がここにいたのが最大の要因だ！！」

そこからは一瞬だった……フリーダムは空高く舞い上がり、プラズマ砲とレールガンを展開し一発ずつ命中させ一撃で敵を深夜に咲く花火と化していった。

「――偽ラクスか……、議長が関与している可能性が高いな。真の目的はなんななのか調べる必要があるな」

シオンは黒煙が立ち上ぼる中、新なる決意が心の中に生まれた。

「ザフトに戻って調べるか…」

第七話「シオン、ザフト復隊」

「じゃあ、行ってくる」

クリムゾン・ファングの格納庫ではシオンを見送る為にメインクルー達が集まっていた。

シオンは軍人時代の時に着ていた赤服を身に纏っていた。

「全く、勝手な事ばっかやりやがって。　少しはこっちの身にもなりやがれ」

レイガが明らかに嫌そうな表情をするがそれは一瞬だけだった。

「だが、お前の居場所はここだ。　だから生きて俺達の元に帰って来いよ？」

そう言ってシオンの髪をクシャクシャにする。

「わかってるって、そっちこそ俺が戻って来るまで落とされるなよ」

「バ～カ、俺達がそう簡単に死ぬ訳が無いだろ？　ラクス様達の事は俺達が守るから安心して行って来い」

「ああ！」

レイガと言葉を交わした後、今度はシィルフが言葉を発した。

「シオン、あのレイって奴には気をつけろ。　アイツからは俺と同じ感じがする」

「それは、アイツもって事か？」

「確証は無いがな、だとしたら俺達にとっては厄介だ」

「わかった、気をつけとくよ」

シィルフはシオンに手を差し出す。　その行為に？を出すが、その意味に気付き手を握り返す。

「お互いまだ死ねない、まだ死んじゃいけない身だ。　その事を肝に銘じて置け」

その言葉が最後になり、手を放した。

「シオン、また逢えるよね？」

リオが悲しそうな表情でシオンに問い掛ける。

「大丈夫だ、まだ死ぬ訳にはいかないし昔みたいにいきなり姿を消すって訳じゃないからな」

「うん…」

シオンが励ますがなお暗い表情になるリオに近付き優しく抱き締める。

「だからお前もそれまで死ぬなよ？」

「うん、わかった。　元気でね、お兄ちゃん」

「はは、何年ぶりかな？　そう呼ばれるのは。　じゃあな」

それぞれ別れの言葉を告げ、メインクルーは格納庫を出て持ち場へと戻って行く。　シオンは機体に乗り込むべく昇降台へと乗った。

〈――確かマスターとリオは兄妹じゃないでしょ？〉

機体に乗り込み起動を開始すると、アルが問い掛けて来た。

「聞いてたのか？」

〈まぁね～〉

その発言にシオンは昔を思い出す。

親に連れてかれ、オーブに移り住むようになってから最初にできた友達。

やがて家が隣り同士であったため家同士の交流が多かった。

そこから家族同然にいつも一緒に居てシオンの事を兄と呼ぶようになったのだ。

しかしシオンのことを数年前から名で呼ぶようになっていたのだ。

「俺とリオは義理の兄妹とも幼馴染みとも言える関係なんだ」

その間に機体の起動準備を終わらせ、あとは離艦するのみになっていた。

『じゃあ、シオン君準備はいい？　ハッチ開けるよ』

通信士のサハナから通信が入りブーゲンビレアはカタパルトに接続された。

『シオン機、発進どうぞ』

「じゃあな、みんな！！」

シオンは自らの行く道に決意を込め、スラスターに息を吹き込んだ。

「――さて、ザフトに戻るとは言ったもののプラントに行くのは

面倒だな」

シオンは孤児院でバルトフェルドが言ってた言葉を思い出す。

『オーブは間もなく地球軍に組するだろう、代表は頑張っているが最早時間の問題だ』

これがミネルバに送った秘匿通信だ。

「そうなると、ミネルバが保つかどうかだし……。　仕方ない、ここはあの人に頼むか」

シオンはいくらか悩んだ末、ある所に通信をいれるために幾つかの数字を打ち込む。

「う～ん……まだこの番号生きてるのか微妙だな」

シオンが数字を入れ終わりしばらくすると通信が音声のみで入って来た。

『この番号を使うとはどういう事かな、シオン君？』

回線を開くとデュランダルの声が聞こえて来た。

「……まだこの番号生きてたんすか？」

『この番号は有事の際の通信として使用しているからね、それに来た番号はこちらで分かる様になってる。　それで、いったい何の用かな？』

「実は、折り入ってお願いがあるんですが……」

「──クソッ、何でこんな事に！！」

シンはいま海の上で地球軍のウィンダムと交戦中だった。

ミネルバがオーブ領海から出た時待ち伏せされてた地球軍艦隊から攻撃を受けていた。

背後には領海に戻る事を許さない為か、オーブの艦隊が展開されいる。

ミネルバはこの四面楚歌の状態から活路を見出だすべく、眼前の地球軍に奮戦するしかなかった。

「当たれぇっ！！」

「落ちろッ！！」

飛行能力を持たないザクには重力下での空中戦はできない為、ルナマリアとレイはハッチの上から迎撃するしかなかった。

「クソ、数が多過ぎる！！」

戦艦一隻、ＭＳ三機に対してこの敵の戦力は異常だった。

シンはなるべくウィンダムをミネルバに近付けさせないと一人、前線で機体を動かしていた。

「しまった！！」

一瞬の隙をつかれ、右足に被弾してしまい機体が不安定になる。

その不安定な姿勢ですぐに行動できる訳もなく、数機のウィンダムからロックされてしまった。

「クソォッ！！」

最早此所までか。シンは迫り来るミサイルに死を覚悟した。　直後に響く轟音、インパルスは濃煙に飲み込まれていった。

「ーーッ！！　……アレ？」

しかしいつまでたっても機体が爆発しないのでシンは状況を確認しようとモニターを見た。

「シオン……さん？」

煙が晴れたそこにはビームシールドを展開し、インパルスを守るように浮いているブーゲンビレアがそこにいた。

「アブね～……間に合ったか」

シオンはインパルスが無事だと言う事で安堵の息を吐いた。

『シオンさん、何でここに？』

シンが戸惑うのも無理はない、オーブに入国する前に別れどこか他の場所に向かったと思っていた人物が今、目の前にいるのだ。

「詳しい事情は後だ！　俺もやるから一気にいくぞ！！」

『はい！！』

シオンの言葉に消沈しかけていた闘志にまた火が燃え上がる。

『シオン、貴方どういう事なの！？　アージ・ファングがこの戦闘に介入しているの！？』

シンを守った光景を見たタリアがシオンに通信を入れた。

「いえ、これは俺個人の意思です。　それにＦＡＩＴＨとして仲間を見捨てる訳にはいかないので」

ＦＡＩＴＨと名を出した時タリアが目を見開いたが全てを察し次の言葉を出した。

『後程詳しい事情を聞くとして、味方になってくれる。　そういうことでいいのかしら？』

「それで構いません」

『ではこれより本艦はブーゲンビレアを味方と認識し行動に移ります。　シオン、貴方にはＭＳ隊の指揮をまかせます』

「了解。　シン聞いての通りだ遅れるなよ」

シオンがクリムゾン・ファングにあった予備のシュミッターでウィンダムをマルチロックしトリガーを引いた。

「さぁ、トゥーソード・トゥーガンの戦い……その身に刻め！！」

シオンが両手に構えたシュミッターで迫るウィンダム部隊に突っ込む。

近くの敵にはシュミッターにビームエッジを発生させ斬り付け、離れた敵にはビームライフルを放つ。　それはまるで踊るかの様な動きだった。

〈前方の艦隊から新たな機体の熱紋を感知、どうやらＭＡっぽいよ？〉

踊りの最中にアラートが鳴り、アルが原因を説明する。

するとミネルバから通信が入り陽電子砲を放つ為射線上から退避せよだった。

シオンとシンは退避し、ミネルバから放たれた陽電子の咆哮は敵の四本足のＭＡ―ザムザザー―を飲み込まんと襲いかかる。

しかし当たる直前に淡い光を展開しながら機体を傾かせ真っ正面から受けた。

「……ふ～ん、連合の技術も随分上がったもんだな」

ミネルバから放たれた陽電子砲でもザムザザーから出された光に遮られその身には傷一つつく事はなかった。

その光景にシオンは連合の技術力向上に関心した。

「シン！　一気にあのＭＡを叩くぞ」

「はい！！」

シオンの合図で二人はＭＡに攻撃を仕掛けた。

「――やっぱりこのＭＳ……どう見てもフリーダムとジャスティスだよな？」

孤児院が破壊され、身寄りのないキラ達は機密ドッグで改修されていたアークエンジェルに身を隠していた。

バルトフェルドは自室としている部屋でシオンから別れる時に受け取ったディスクのデータを見ていた。　そこに映し出されているのは外見は似てるが所々に差異があるフリーダムとジャスティスだった。

「シオン……お前は一体何を考えてる。　この機体のカタログスペックは相当なものだぞ」

バルトフェルドはその図面に書かれている数字に驚愕した。

機動性、武装、新型エンジンによるパワー出力。　どれを取ってもいまのフリーダムの数倍の能力を持つ事となる。

『バルトフェルドさんお願いがあります』

シオンと別れる時に彼はバルトフェルドにこういって二枚のディスクを渡した。

『これを秘密裏に造って下さい』

『これは？』

バルトフェルドはディスクを受けとりながらシオンに尋ねた。

『それは、ＭＳの設計図データです』

『ＭＳ？』

バルトフェルドは渡されたディスクの中身がＭＳデータと知り、声を上げた。

『今のフリーダムはあるシステムが壊れていてそのシステムは二度と作動できない状態です』

『？　なんだ、そのシステムというのは』

そんなシステム、修理の時にあったか？と思いつつシオンに聞き返した。

『パイロットの精神、感情に反応するシステムです。　感情が強ければ強いほどフリーダムはその力を増します、しかしそれには代償が伴い機体は大きなダメージを受けます。　今はそのシステムが作動しない為、その影響で本来の性能を発揮できません。　今は大丈夫ですがこのままだとマズい状態です』

『それはどういう事だ？』

『フリーダムの性能はいまのＭＳ、セカンドシリーズに比べて引けはとりますが操縦技術が高ければ互角に渡り合えます。　だけどそれも時間の問題です』

シオンは回りくどい事は言わずに思った事を素直に話した。

『これから力が必要な時があると思います。　その時の為にこれが必要になりと思います』

『そうか。　で、これは？』

『それはＡＩのプログラムがはいっているディスクです』

『ＡＩだと！？』

突然大きな声を上げたバルトフェルドにシオンは慌てて口を塞ごうと迫った。

『ボソッ（あ、アンタって人は！？　機密単語を大声でいきなりポロリか！？）』

シオンのその慌てぶりから流石にマズかったかと思い謝罪した。

『す、スマン。　しかしシオン、ＡＩってホントか？』

『えぇ、フリーダムに搭載したシステムはこのＡＩへの一歩ですし、俺の機体は試作型ＡＩを搭載した機体ですから。　後これはモルゲンレーテにいるエリカさんに、あの人に渡して下さい。と伝えてくれれば分かりますので』

そう言って新たに二枚のディスクを渡した。

『これもＭＳとＡＩのデータか？』

『はい、詳しい事は言えませんがオーブの技術者じゃないとこれは無理ですから……』

一際険しい表情をするシオンに深い事情があるなと思った。

『わかった、どうせこれからモルゲンレーテにいくからその時に渡して置く』

シオンは自分の頼みを聞き入れてくれたバルトフェルドに感謝し自分が属する所に帰って行った。

「──シン、後ろだ！！」

『このぉおおお！！！！！』

シオンの警告でシンは背後に迫っていたウィンダムをビームサーベルで斬り伏せた。

シオンの駆るブーゲンビレアとシンが駆るインパルスは連合のＭＡ、ザムザザーを含むウィンダム部隊に苦戦を強いられていた。

〈分析の結果、敵機ＭＡザムザザーは陽電子リフレクターを搭載した機体だよ。　陽電子リフレクターを展開中は遠距離での光学兵器に対して圧倒的な防御力があるよ〉

先程ミネルバの陽電子砲を無効化したバリアを分析していたアルが結果を報告した。

「じゃあビームサーベルで斬りつけるのは？」

〈多分、大丈夫〉

「よし。　シン、あのＭＡは任せた！！　接近してビームサーベルで撃破するんだ！」

『シオンさんは！？』

「俺はウィンダム部隊を相手にする！！　お前はＭＡに集中しろ！！」

『わかりました！！』

シオンはシンから離れ、シンがザムザザーに集中できる様にウィンダム部隊を相手にする。

「いくらなんでもウィンダム多過ぎやしないか！？」

シオンが戦闘に参加してからすでに４０機はすでに撃破したであろう。しかしそれでも数は衰えるどころか逆に増えている様に感じる。

「それでも、やるしかない……！！」

シオンは決意しアルに命令を放つ。

「アル、リミッター解除。　モード2に移行、使用限界時間は！？」

〈およそ五分が目安だよ〉

「五分か……微妙だが一気に行くぞ！！」

ブーゲンビレアの各スラスターが火を吹き、フレームから淡い光を出しながら猛スピードでウィンダム部隊に突っ込む。

シュミッターにビームエッジを発生させ、一撃で真っ二つにして続け様に次の敵に向かう。

〈残り時間後四分〉

敵のビームライフルやミサイルを避けつつ瞬く間にウィンダムを落とし続けて行く。

〈残り三分〉

「うぉおおおッ！！」

一機、また一機と落とし続ける。

〈残り二分〉

シオンはビームエッジの発生を止め、射撃へと攻撃方法を変えた。

アルのアシストを得て、機敏に動きながらガンスリンガーの様に

敵を撃破して行く。

〈ラスト一分〉

ブーゲンビレアの勢いは更に増しやがて確認出来る敵は一機となった。

「お前で…終わりだぁっ！！！！！」

〈モード2、起動終了〉

アルが終わりの言葉を放ったのはシオンが最後の一機を接射、爆発にのまれない様に蹴飛ばした直後だった。

「ハァ……ハァ……」

シオンはその疲労からか肩で呼吸していた。

ブーゲンビレアは胸部にある排気口から蒸気を出し冷却を開始していた。

「これで、終わりか？」

『うわぁああ！！！！！！』

「シン！？」

突如聞えたシンの悲鳴にモニターを切り換えた。

「――――くそ、なんて速さだよコイツ」

シンはザムザザーに対して防戦一方だった。

シオンに近付いてビームサーベルで攻撃しろ言われたが、想像以上に機動性の高さを披露するザムザザーになかなか近付けなかった。

ザムザザーは前脚と思われる部分からビーム砲をシンに向かって撃ち放つがシンはシールドで防ぐ。

「しかも、なんてパワーだよ……。　！？」

突如なるアラートにシンは目を見開く。

するとエネルギー残量を示すメーターが危険域にはいったと示していたのだ。

「くそ、こんな時にッ！！」

『ザフト軍艦ミネルバに告ぐ』

「！？」

直後、全周波数回線で送信された通信がシンの耳にはいった。

それはオーブの護衛艦からの発信だった。

『貴艦はオーブ首長国の領海に接近中である、我が国は貴艦の領海の侵入を許す訳にはいかない。速やかに転進されたし』

「な、そんな！？」

この状況で非情なる警告を受け、シンは言葉を失った。

自分はＭＡと交戦中だ、いまミネルバに近付けばそのミネルバを危険に晒す様なものである。　ルナマリアとレイはシオンが仕留め損ねたウィンダムの迎撃をしているが、インパルスと同じバッテリー式なのでエネルギー残量が僅かしかない筈だ。

シオンも次々にウィンダムを落としているため動けない。　まさに万事休すだ。

するとオーブ艦隊がミネルバに向け威嚇射撃を行い始めた。

「オーブが……本気で……」

シンは心の何処かで信じていた。　家族と一緒に暮らしていた国、ナチュラルとコーディネイターが共存できる国、ウズミ代表が貫いて来た理念を受継ぐカガリ。

細い糸で繋っていた信じる心が、いま音をたてて切れたのだ。

「！！　しまった！！」

失意の念にかられていたシンにザムザザーの鋏状の爪が襲いかかる。

咄嗟に機体を動かしたが間に合わず残された脚部に爪が挟み込まれた。

「うわぁああ！！！！！」

ザムザザーは掴んだ脚部を引っ張り海に叩きつけようと海面に急降下した。

『シン！？』

途中でシオンが通信をいれたが、身体を襲う強力なGに死を覚悟しているのかシンの耳には入らなかった。

彼の脳裏には走馬灯の様にオーブでの思い出が駆け巡る。

楽しかった日常、家族と出かけた行楽、キャンプ。　そしてふざけ合って追いかけていた時にみた妹、マユの笑顔……。　そうだ、俺は……。

「こんな…、こんな事で俺はァッ！！！」

シンの中に眠る力が弾ける。

「コノォッ！！」

シンは操縦桿を強く握り締め、残り少ないエネルギーをフルに使う。　脚部を無理矢理引きちぎりながら抜け出しビームサーベルでザムザザーに上から兜割の要領で突き刺した。

爆散するザムザザーを見向きもせず、ミネルバに通信を入れる。

「ミネルバ！　メイリン、聞えるか！？」

『シン！？』

今までのシンとは違う口調にメイリンは戸惑う。

「デュートリオンビームを、それからレッグフライヤー、ソードシルエットを射出準備！！」

『え！？』

「はやく！　やれるな！？」

矢継早に言う指示にメイリンは困惑する。　するとタリアが何が考えがあるのだろうと思いメイリンに言葉を放つ。

『指示に従って！！』

『はっ、はい！！』

タリアから言われ、メイリンは素早くコンソールに打ち込む。

『デュートリオンビーム照射！！』

ミネルバから放たれた光はインパルスの額の部分に当たる。

すると残り少なかったエネルギーが最大にまで回復した。

その後にミネルバから射出されたレッグフライヤーに換え、ソードシルエットを受け取りソードインパルスになる。

「ウオォオオオッ！！」

シンは機体を操り、次々に敵艦のブリッジをエクスカリバーで斬り裂いた。

シオンはその様子を冷や汗を浮かべながら見入っていた。

「なんだ……あの動きは…」

シオンを襲う不快感、これが何の意味をもたらすのかは分からない。

ただ一つ言える事は…

「……アイツ、自らの力に翻弄されてる」

今のシンの動きは感情に任せて敵艦を破壊している。

だが強さは格段に向上しているのは確かだ。その証拠に見渡す限り在った敵部隊は今では濃煙へと姿を変えていたのだ。

「──ッッ！　……ハァ、ハァ…」

シンは敵艦全てを破壊した後正気を取り戻し息を切らしていた。

「敵は……、もういないか」

レーダーで状況を確認する。

表示されているのはシオンのブーゲンビレアとルナマリアのガナーザク、レイのブレイズサクファントム、そしてミネルバだった。

「ミネルバは無事か」

『おいシン、聞えるか？』

安堵の息を吐くとシオンが通信入れて来たので回線を開く。

「はい、なんですか？」

『もう戦闘は終わったんだ、艦に戻るぞ』

「わかりました」

二人はミネルバへと戻って行った。

シンは格納庫でインパルスから降りるやいなや整備班から盛大な歓声を身に受けた。

「な、なんだ!?」

いきなりの歓声にシンは戸惑う。それをみたヴィーノはシンに説明をする。

「みんなお前の活躍振りに感動してるんだよ!!」

ヴィーノにそう言われ、先程の戦闘を振り返る。

あの絶望的な状況の中でありながら自分達は生きている、それが不思議でならなかった。

「あのシオンって人が来てくれたおかげで助かったしさ」

シンは後からミネルバに収容されるブーゲンビレアを見て思う。シオンの介入によって生き残ったが、もしシオンが来なかったら今ごろどうなっているかは分からないであろう。

下手をしたら死んでいたと思うと肝が冷える。

インパルスの後に収容されたブーゲンビレアからザフトの軍服に身を包んだシオンが降りて来た。

その姿に皆がどよめきだつ。

「シオンさん、それ赤服ですよね?」

歩み寄るシオンにシンは声を掛ける。

「あぁそうだ。　ザフトに復隊したから私服じゃマズいだろ、どうだ、似合うか？」

「シオンさんの軍服姿初めて見た……」

「そっちかよ！！」

シンの期待外れな返答に思わず突っ込みをいれる。

「まぁ確かに初めてだわな、アカデミーの時は一度も軍服きなかったからな」

一通り言葉を交わすとシンから離れる。

「シオンさん、何処へ？」

「ん？　艦長の所。
復隊の詳細を話さないといけないからな」

「あ、じゃあ俺も行きますか？」

「いや、いいよ。艦長の部屋は分かるから一人で大丈夫だ、お前は少し休んどけ」

そう言ってシオンは格納庫から出て行った。

「デュランダルさんの動向、ここで調べさせてもらうよ――」

第八話「ＦＡＩＴＨ」

「――――なるほど。　詳しい内容はわかりました。　……ええ、では失礼します」

タリアは艦長室でデュランダルにシオンのザフト復帰が本当かどうかを問い質した。

デュランダルの返答はイエスで、しかも特務隊『ＦＡＩＴＨ』の一員だと言う事を明した。

「そういう訳で、これからお世話になります」

礼儀良く頭を垂れ、意思表示をする。

「はぁ……」

議長も彼も何考えてるんだか……そう思い痛む頭を押さえる。

「では、これで失礼します」

軍人らしくシオンは敬礼の後、艦長室を辞する。

「あのぅ艦長、お一つお聞きしても宜しいですか？」

シオンが出て行ったあと、アーサーはタリアに恐る恐る質問した。

「あ？　何？」

口調が変わり、アーサーはたじろく。

「あ、いや……。」

タリアは再び頭を抱えた。

シオンがミネルバに来てから数日が経った。

「……なんだ？」

自分の機体の調整のため格納庫に来ていたシオンは、格納庫に入る赤い機体が目に入った。

「あ、シオンさん」

シンはシオンを見つけるや否や直ぐさま駆け寄って来た。

「あの機体、なんだ？」

すると機体のハッチが開けられ中から出て来た人物にシンは声をあげる。

「あ、アイツ！！」

シンは駆け足で機体から出て来た人物の下に向かった。

「認識番号２８５００２、特務隊ＦＡＩＴＨ所属アスラン・ザラ、搭乗許可を」

「おいアンタ！一体何のつもりだよ！！」

「シン、言葉に気をつけなさい。　彼はＦＡＩＴＨよ」

「はぁ？」

改めてアスランを見ると左胸につけられた勲章に気がついた。

「何でアンタが？」

「シン！」

シンに対し注意しながら自身はアスランに敬礼をする。　ルナマリアの行為にならって周りの人物もアスランに敬礼をする。

シンも敬礼をするがその表情は納得いかないと言う顔だった。

「艦長にお会いしたいのですが、今艦長は艦橋ですか？」

アスランは近くに居た整備員に聞いた。

「あ、はあ……多分」

「私が御案内「確認して御案内します」

戸惑いながら応える整備員に代わり、メイリンが案内役を出ようとするが、姉のルナマリアに遮られた。

ありがとう、とアスランは応えルナマリアに付いていく。そのアスランをシンは呼び止める。

「ザフトに戻ったんですか？」

挑戦的な発言にアスランは溜め息を吐き応える。

「相変わらず牙剥き出しの狂犬ぶりだな君は」

「はあ！？」

「忙しいんだ、文句なら後で聞いてやる」

「なっ！！」

軽くあしらわれ怒りを露わにする。

「（シンの奴軽くあしらわれてるな……）」

苦笑を浮かべながらその様子を見ていたシオンにアスランは気付き声を掛けるかけて来た。

「シオンさん、貴方にもお話があるので一緒に来て下さいませんか？」

「議長から話は聞いたか？」

その問いにアスランは頷き応えた。

「なら俺が案内しよう、ルナマリア、俺が案内するからいいよ」

「え、でも」

「ちょっと男二人で話したい事もあるからな」

「わかりました……」

ルナマリアは渋々と下がる。その顔はおもちゃを取り上げられた子供の顔だった。

「あぁ……そう拗ねるな、ルナマリアの好きな奴作ってやるから」

「ほんとですか！！　絶対ですよ！！」

その変わり様から現金な奴という印象が強まった気がした。

二人はエレベータに乗り込む。

「いつ、ミネルバはオーブを発たれたんですか？」

「オーブに行ったのか？」

「ええ、スクランブルを掛けられました」

「そりゃそうだろうなあそこはもう太西洋連邦に加盟したからな。それにミネルバはそのオーブから攻撃を受けたんだ」

その言葉にアスランは驚きの声を上げる。

「けど、カガリがそんな……」

「わかってる、代表がそんな事をなさる訳がない。　誰かの仕業だろう。　例えば結婚相手のユウナ・ロマとか言う奴な」

「結婚！？」

結婚という単語に過剰反応を示すアスラン、手に持っていた荷物を床に落とす。

「（ニヤニヤ）」

「な、なにがおかしいんですか！？」

「いやアスランの反応が面白くてな」

「からかわないで下さい！！」

顔を赤くし反発するアスランにシオンは更に言葉を続ける。

「だけど、心配はいらない。　キラが代表を結婚式場から拉致したからな」

「え？　キラが？」

「そう、俺の仲間から知らせてきたからな」

「はあ…」

安堵の息を吐くアスランはふと出て来た親友の名前に気がついた。

「あれ、シオンさんキラと知り合いなんですか？」

「最近知り合ったんだ」

「……シオンさん、ひとつだけ聞いてもいいですか？」

「……ザフトに復隊した事か？」

先程とはうってかわって真剣な表情で問い詰めるアスランにシオンも表情を引き締める。

「えぇ。　何故ですか？」

「……デュランダルさんの動向を探るためだ」

「え？」

予想外の言葉に呆気を取られる。

「アスランは見たか？　プラントにいるラクス様を」

「（ミーアの事か？）」

議長に面会しにプラントに行った時に見掛けた少女を思い出す。
始め見た時は本人かと思ったが、口調や性格が違うのですぐに別人だとわかった。

「実を言うとなあのラクス様の演説の時に俺は本人達といた訳よ」

そこまで聞いて、アスランはやっと気付いた。

「じゃあ……」

「そういう事だ」

そこまで話すと二人は艦長室についた。

「おっと、この話はここまでだ。　艦長、シオンです、アスランをお連れしてきました」

『はいってちょうだい』

「「失礼します」」

二人はタリアの許可を得て、艦長室の扉をくぐった。

「アル、調子はどうだ？」

シオンはあの後再び格納庫に来ていた。胸にはアスランと同じＦＡＩＴＨの証しでもある勲章がつけられていた。

〈各システムに異常はないよ〉

「よし」

〈マスター、この新しい武装。シールド？〉

アルはモニターにある設計図が映し出した。

『追加武装』と題された図面を見ると、一見盾を思わせる作りになっていた。

盾を思わせるといった訳は従来の物より小さく先端が鋭くなっており、『突き刺せる』といった方がしっくり来るためだ。

「一応ビームシールド内蔵だから盾としての役割も果すさ、ただ攻撃に主観を置いてるけど。　まあシュミッターには限度があるしな」

そこでふと視線をアスランのセイバーに目をやるとコクピットにルナマリアが覗きこんでいた。

アスランも自分の機体の調整を行ってたらしく、その時にルナマリアが最新鋭というセイバーに興味をもち覗きこんだ。

シオンは調整を終えアルを停止してロックをかけると昇降装置を使い機体から降りた。

「ルナマリア、お前機体の調整は終ったのか？」

「あ、はいさっき終わりました」

「そうか、後で俺の部屋に来な。　約束の奴作っとくから」

「え、ほんとですか！？　やった！！」

両手をあげ喜びを表現するルナマリアを見ながらシオンは自室に向かう。

「ルナマリア～そんな高いとこではしゃいでたら『見える』ぞ」

その一言に下で作業していた皆が一斉に見上げた。

「え…！！　ちょっ！！」

顔を赤くしスカートを手で押さえる。

近くにいたアスランは何処か残念そうな顔をしていたのは、秘密である。

「～～～！！」

唸るルナマリアを余所に手をヒラヒラさせ歩を進めた。

「そだシンとレイも機体の調整は終ったのか？」

シオンはふと思い出したかのように技術班達と話をしている二人に声を掛けた。

「先程終了しました」

「俺も終りました」

「ならちょっと来てくれないか？　新作の味見をしてもらいたい

から」

「わかりました」

「いきます、いきます！！」

レイはいつもと同じ無表情で承諾し、シンに至っては久々にシオンの料理が食べれると思い、声を高らかに上げ、二人は格納庫から出て行くシオンの後を追った。

その数十分後、レイの断末魔とシンがレイの名を呼ぶ声が艦内に響き渡ったのは別の話である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8319k/

機動戦士ガンダムSeed Destiny

2010年10月20日21時01分発行